

開催にあたって

国立歴史民俗博物館では、人間文化研究機構が推進する「日本関連在外資料調査研究」の一環として、2010年度から2015年度にかけて、シーボルトに関する調査研究をおこなってきました（「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」〈2010年度～2015年度、総括責任者：久留島浩→日高薫〉）。

このプロジェクトは、19世紀に収集されたことが明らかな日本関連在外資料（「もの資料」および文献資料）の統合的な調査・研究を進めるとともに、それらの成果を広く共有し総合化するための仕組み作りを目指すもので、主な調査内容には以下のものがあげられます。①ミュンヘン五大陸博物館所蔵のシーボルト・コレクションの悉皆調査とデータベース化、②シーボルト父子関係文献資料の調査（ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家／ボーフム・ルール大学・ベルリン中央図書館所蔵）とデータベースの統合、③シーボルトが開催した日本展示に関する文献資料の翻訳・刊行、④ライデン国立民族学博物館所蔵のブロンホフ自筆コレクション目録の翻刻、翻訳など。調査は、シーボルト関係資料の所蔵者や、国内外の研究機関と連携関係を保ちながら進められました。

現在、国立歴史民俗博物館で開催中の企画展示「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」は、上記の人間文化研究機構による国際的な共同研究の成果をもとに、これまで注目される機会の少なかったシーボルト二度目の来日時の収集資料に焦点をあてました。本シンポジウムは、この企画展示に関連して、ミュンヘン五大陸博物館における調査に関わったメンバーによる各分野からの報告をもとに、シーボルト・コレクションの特徴を明らかにし、19世紀という時代におけるシーボルトの日本紹介の意図と意義について認識を深めようとするものです。シーボルト没後150年の節目に、新たなシーボルト像についてお集まりいただいた皆さまと共に考える機会となれば幸いです。

（国立歴史民俗博物館）

歴博国際シンポジウム

シーボルト・コレクションから考える

日 時：2016年7月30日（土） 13：00～16：30

会 場：国立歴史民俗博物館 講堂

主 催：国立歴史民俗博物館

プログラム

- 13：00 開会挨拶 久留島 浩（国立歴史民俗博物館長）…………… 1
- 13：05 企画趣旨 日高 薫（国立歴史民俗博物館）…………… 6
- 13：15 基調講演 「エドム＝フランソワ・ジョマールとの書簡交換からみた
民族学及び民族学博物館に関するシーボルトの見解」
ブルーノ・リヒツフェルト（ミュンヘン五大陸博物館）…………… 11
- 14：05 報告 1 「シーボルト・コレクション中の長崎関係資料について」
原田 博二（長崎純心大学）…………… 18
- 14：30 (休憩)
- 14：45 報告 2 「シーボルト事件と伊能日本図
－ヨーロッパに残るシーボルト関係地図資料から考える－」
青山 宏夫（国立歴史民俗博物館）…………… 28
- 15：10 報告 3 「シーボルト・コレクションの彫刻」
佐々木 守俊（岡山大学）…………… 35
- 15：35 報告 4 「陶磁器から考えるミュンヘンのシーボルト・コレクション」
櫻庭 美咲（国立歴史民俗博物館）…………… 42
- 16：00 質疑応答
- 16：25 閉会挨拶

※司会 大久保純一（国立歴史民俗博物館）

表紙画像説明：『ネーデルランス・マハザイン *Nederlandsch Magazijn*』48号（1863年11月）より「日本の宗教」
Brandenstein-Zeppelin Family Archives

Exploring the Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Date: July 30, 2016

Venue: National Museum of Japanese History

Organizer: National Museum of Japanese History

PROGRAM

- 13 : 00 Opening Remarks
Hiroshi Kurushima, Director – General, National Museum of Japanese History 1
- 13 : 05 Kaori Hidaka, National Museum of Japanese History 8
- 13 : 15 Keynote Speech “Siebold’s views on ethnology and ethnological museums in his correspondence with Edme-Francois Jomard”
Bruno J. Richtsfeld, Museum Fünf Kontinente 13
- 14 : 05 Report 1 “Nagasaki-related materials in the Siebold Collection”
Hiroji Harada, Nagasaki Junshin Catholic University 24
- 14 : 30 Break
- 14 : 45 Report 2 “The Siebold Incident and the Ino Map of Japan:
From the perspective of Siebold-related map materials remaining in Europe”
Hiro’o Aoyama, National Museum of Japanese History 32
- 15 : 10 Report 3 “Sculpture Works in the Siebold Collection”
Moritoshi Sasaki, Okayama University 39
- 15 : 35 Report 4 “Siebold Collection in Munich as observed through ceramics”
Miki Sakuraba, National Museum of Japanese History 46
- 16 : 00 Q&A
- 16 : 25 Closing Remarks

※ Moderator Jun’ichi Okubo, National Museum of Japanese History

講師の紹介

日高 薫 (ひだか かおり)

Kaori Hidaka

国立歴史民俗博物館 教授

Professor, National Museum of Japanese History

- ・「海を渡った日本漆器Ⅱ — 18・19世紀 —」『日本の美術』427号、1-98頁、2001年
- ・『異国の表象 近世輸出漆器の創造力』ブリュッケ、2008年
- ・(編著) 展示図録『楽器は語る — 紀州藩主徳川治宝と君子の楽 —』国立歴史民俗博物館、2012年
- ・「シーボルト・コレクションの漆器」国立歴史民俗博物館編、国際シンポジウム報告書『シーボルトが紹介しなかった日本 — 欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために —』大学共同利用機関人間文化研究機構、181-188頁、2015年3月

ブルーノ・リヒツフェルト

Bruno J. Richtsfeld

五大陸博物館

Curator Director of the East, North and Central

東・北・中央アジア部門学芸部長

Asia Department, Museum Fünf Kontinente.

- ・ 'Philipp Franz von Siebold (1796-1866). Japanforscher, Sammler und Museumstheoretiker', In: Museum für Ostasiatische Kunst der Stadt Köln; Staatliches Museum für Völkerkunde (ed.): *Aus dem Herzen Japans. Kunst und Kunsthandwerk an drei Flüssen in Gifu. Köln, München* 2004, pp. 97-102.
- ・ 'Wilhelm Heines Japan-Gemälde im Staatlichen Museum für Völkerkunde München', In: *Münchner Beiträge zur Völkerkunde* 13, 2009, pp. 210-240.
- ・ 'Die feierliche Begrüßung der Mazu'. Aus dem Chinesischen übersetzt und bearbeitet von Bruno J. Richtsfeld. In: Claudius Müller & Roderich Ptak (ed.): *Mazu. Chinesische Göttin der Seefahrt*. München 2009, pp. 74-143.

原田 博二 (はらだ ひろじ)

Hiroji Harada

長崎純心大学 講師

Lecturer, Naasaki Junshin Catholic University

- ・「唐寺と唐僧」若木太一編『長崎・東西文化交渉史の舞台』勉誠出版、2013年
- ・「ライデン国立民族学博物館蔵川原慶賀筆『人の一生』について — シーボルトコレクションを中心に —」『長崎歴史文化博物館研究紀要』第4号、25-42頁、2009年
- ・「長崎と広州」荒野泰典他編「近世的世界の成熟」『日本の対外関係』6巻、吉川弘文館、2010年

青山 宏夫 (あおやま ひろお) Hiro' o Aoyama
国立歴史民俗博物館 教授 Professor, National Museum of Japanese History

- ・『前近代地図の空間と知』校倉書房、2007年
- ・(編)『オランダ・ドイツに所在するシーボルト関係地図資料』国立歴史民俗博物館、2016年3月
- ・「シーボルトの地図編纂とブランデンシュタイン家資料」『シーボルトが紹介したかった日本 — 欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために —』国立歴史民俗博物館、117-131頁、2015年3月

佐々木 守俊 (ささき もりとし) Moritoshi Sasaki
岡山大学 准教授 Associate Professor, Okayama University

- ・『謎説き浮世絵叢書 歌川広重 保永堂版東海道五拾三次』二玄社、2010年
- ・「安祥寺五智如来坐像について」『國華』1306号、2004年8月
- ・「神護寺五大虚空蔵菩薩坐像の図像について」『美術史』147号、1999年10月

櫻庭 美咲 (さくらば みき) Miki Sakuraba
国立歴史民俗博物館 機関研究員 Research Associate, National Museum of Japanese History

- ・『西洋宮廷と日本輸出磁器 — 東西貿易の文化創造 —』藝華書院、2014年
- ・‘The Chinese Junks’ intermediate trade network in Japanese porcelain for the West’, “*Chinese and Japanese porcelain for the Dutch Golden Age*”, Rijksmuseum Amsterdam, pp. 109-127, 2014
- ・「オランダ東インド会社従業員による個人貿易 — 西洋向け肥前磁器輸出の考察 —」『東洋陶磁』44号、75-92頁、東洋陶磁学会、2014年
- ・(編著)『オランダ東インド会社貿易史料にみる日本磁器』九州産業大学21世紀COE 柿右衛門様式陶芸研究センター、2009年

シーボルト・コレクションから考える

企画趣旨

日高 薫（国立歴史民俗博物館）

19世紀に2度にわたり来日したドイツ人医師、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold）は、江戸時代の日本に近代的な医学を伝える一方で、日本の自然や生活文化に関わる調査研究にとりくみ、膨大な資料を収集してヨーロッパに持ち帰った。シーボルトの日本研究が、帰国後に出版された『日本 *Nippon*』（1832-1851）や『日本動物誌 *Fauna Japonica*』（1833-1850）、『日本植物誌 *Flora Japonica*』（1835-1844）の三部作に結実し、後世の日本学や動植物学に大きく貢献したことはよく知られるところである。

しかし、シーボルトが西洋世界に向けての日本紹介を、著書の出版のみならず、博物館展示を通じて行おうとしていたことについては、今までほとんど注目されてこなかった。この二つの手法による日本紹介の構想は、日本に到着した数か月後から、シーボルトの意識の中で車の両輪のごとく結びつきながら重要な位置を占め続けていたことが明らかである。帰国後、彼の第一次コレクションの大半がオランダ政府、第二次コレクションはバイエルン政府によって買い上げられ、それぞれ、現在のライデン国立民族学博物館およびミュンヘン五大陸博物館（旧称バイエルン国立民族学博物館）の中核をなす所蔵品となっていることは注目に値する。シーボルトがめざし、そして実践した日本コレクションの展示公開は、初めての本格的な日本紹介であるとともに、民族学博物館のはじまりでもあったのである。

国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）を中心とする研究組織は、人間文化研究機構による「日本関連在外資料の調査研究」の一環として、シーボルト・コレクションに関わる調査研究事業を、2010年から2015年度の6カ年にわたって推進してきた。（「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」[久留島浩→日高薫]）

このプロジェクトでは、世界中に散在するシーボルト関係資料を対象とし、先学によるこれまでの研究成果や資料情報を共有化し統合するための仕組みをととのえとともに、ミュンヘン五大陸博物館が所蔵するシーボルトの第二次コレクションの悉皆調査をおこない、初めてその全貌をあきらかにした（総点数6,000点を超える多種多様な資料群の全点画像付データベースは、2016年3月から歴博のホームページ上で一般公開されている）。シーボルトの収集資料としては、従来、ライデンにある第一次コレクションに注目が集まり、ミュンヘンのコレクションは、シーボルト研究および日本研究にとって極めて重要な資料であるにもかかわらず、これまで詳細な調査がなされてこなかった。しかしながら、ミュンヘンの第二次シーボルト・コレクションは、その数の多さや内容のみならず、残された文献資料との照合によって、シーボルト自身の構想による日本博物館を復元的に考察することが可能であるという点で極めて有用である。また、シーボルトが伝えなかった日本像は、二度の訪問による2つのシーボルトのコレクションの全体像をとらえて初めて理解すること

ができる。十分な蓄積が積まれてきたかのように見えるシーボルト研究にも、まだまだ明らかにすべき課題は多く見出せるのである。

本シンポジウムでは、上記の問題意識に基づき、プロジェクトに参加し実際にシーボルト・コレクションの調査研究に携わった研究者からの報告を予定している。

まず、ミュンヘン五大陸博物館のブルーノ・リヒツフェルト氏からは、シーボルトと同時代、彼と同様に民族学博物館の設立構想を抱いていたフランス王立図書館地理学部門管理部長エドム・フランソワ＝ジョマール (Edme-Francois Jomard, 1777-1862) とシーボルトとの往復書簡を通じて、世界初の民族学博物館展示を実現したシーボルトの博物館構想が、当時のヨーロッパにおける民族博物館設立への機運の高まりの中でどのように位置づけられるかについてお話しいただく。

さらに、シーボルト・コレクションに関する今回の調査から得られた情報が、各分野の研究においてどのような成果を導きえたかを、地図研究・長崎研究・彫刻史・陶磁史の専門的な立場から具体的な事例に則して示していただくことにより、シーボルトが心血を注いで収集したコレクションを再評価する契機としたい。

歴博で現在開催中の企画展示「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」は、プロジェクトの成果に基づき、従来のシーボルト研究では見えなかった新しいシーボルト像を提示しようとするものである。その意義は、第一に、ミュンヘン五大陸博物館所蔵のコレクションに焦点をあてることにより、シーボルト・コレクションの全体像を把握する一歩とすることにある。また第二に、このコレクションを用いてシーボルト自身が開催した日本展示を、現存する「もの」資料と日欧両言語による文献資料との詳細な検討により、復元的に考察しようと試みた点である。つまり歴博の展示の中に、シーボルトによる150年前の展示を入れ子にして紹介するという趣旨である。

シーボルトが日本博物館の設立に尽力していた時代は、近代的な博物館の黎明期にあたり、彼の理論は当時としては極めて斬新で先鋭的なものであったといえる。今日、博物館展示は市民の文化生活のなかで日常的なものとなっているが、しかしそれらは先端的な研究成果の反映や、各所に眠っている貴重な歴史資源の発掘・活用、それらに結びついた教育の手段の一つとして、まだまだ開拓の余地を残しているといえるだろう。4月から開始した人間文化研究機構による新たなプロジェクト（「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」）においては、ヨーロッパ所在の19世紀の日本コレクションの調査研究をいかに活用し、国内外の日本研究を活性化させるかという課題を念頭に研究を展開していく。歴博による企画展示開催や、本シンポジウムが、こうした研究事業の意義あるスタートとなることを願っている。

Exploring the Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Project Intent

Kaori Hidaka
(National Museum of Japanese History)

Philipp Franz Balthasar von Siebold, the German physician who resided in Japan on two occasions during the 19th century, introduced modern medical science to Japan during the Edo period, while conducting surveys and research relating to the nature and living culture of Japan and thereupon returned home to Europe with a vast collection of materials. Siebold's Japan related research bore fruit after his return with the release of three works, *Nippon* (1832-51), *Fauna Japonica* (1833-50) and *Flora Japonica* (1835-44), and it is well known that he made considerable contributions in the fields of Japanology and biology of later generations.

However, his efforts to introduce Japan to the western world not only through his publications but also through museum exhibitions have drawn little attention thus far. It is clear that the concept of introducing Japan using these two methods became linked in his mind like two halves of the whole within a few months after first arriving in Japan and continued thereafter to hold a prominent place. Upon his return to Europe, the majority of his first collection was sold to the Dutch government and the second to the Bavarian government. It is worth noting that they currently exist as core collections at the Museum Volkenkunde, Leiden (Museum of Ethnology, Leiden) and the Museum Fünf Kontinente (Five Continents Museum, Munich; the former Staatlichen Museum für Völkerkunde München). The exhibitions of the Japan collection that Siebold sought and realized represent the first full-scale introduction to Japan while also marking the early beginnings of ethnology museums.

Research organizations centered in the National Museum of Japanese History promoted survey and research activities relating to the Siebold Collection for six years (2010-15) as a part of International Collaborative Research on Japan-related Documents and Artifacts Overseas of the National Institutes for the Humanities (*Study of the Siebold Family Collection and Other Materials Collected in Japan and Taken Overseas in the Nineteenth Century*, Hiroshi Kurushima → Kaori Hidaka).

In the project, a structure established for sharing and consolidating existing research results of earlier studies and material-related data targeting Siebold-related materials scattered around the world, while also conducting a comprehensive survey of Siebold's second collection located at Museum Fünf Kontinente in Munich, thus providing the very first full picture of the entire collection (a database including images of all items in the highly diverse array of more than 6,000 items was released on

the Museum's website, *Database of Siebold Family Collection* beginning in March 2016). Of Siebold's collections of materials, the first collection located in Leiden has been the focus of attention while the collection in Munich had not been subjected to a detailed survey in spite of its extreme importance in studies relating to both Siebold and to Japan. Nevertheless, the second Siebold collection in Munich is extremely useful in that it enables a reconstruction study of the "Japan Museum" as conceived by Siebold himself not only because of the large quantity of items and their content but also through verification against existing documentary materials. It has furthermore become possible for the first time to comprehend the image of Japan that Siebold sought to convey by grasping an overall perspective of the two collections that Siebold made during his two sojourns in Japan. Though Siebold-related research may seem to be sufficiently abundant, there still remain numerous issues that need to be clarified.

In the symposium, reports will be presented by the researchers involved in surveys and research of the Siebold collections who actually participated in the project based on the awareness of issues described above.

First of all, Dr. Bruno J. Richtsfeld of Museum Fünf Kontinente will present a talk on the positioning of the museum concept of Siebold, who realized the world's first ethnology museum exhibition, within the rising momentum toward the establishment of ethnology museums in Europe at the time, through the exchange of correspondence between Siebold and Edme-Francois Jomard (1777-1862), a contemporary of Siebold who was curator of maps and plans at the Royal Library of France and who, like Siebold, espoused a concept for the establishment of ethnology museums.

I would furthermore like to take advantage of this opportunity to reevaluate the collections to which Siebold single-mindedly devoted himself by having each give an account of research results in each field that were derived from data obtained through the present surveys of the Siebold collections through specific case examples from the perspective of specialists in research in maps and Nagasaki as well as the history of sculpture and porcelain.

The special exhibition currently being held at the Museum, *Revisiting Siebold's Japan Museum* seeks to present, based on the results of the project, a new image of Siebold that was not revealed through conventional Siebold research. Its significance is that, first of all, it offers a step forward in grasping the overall image of the Siebold collection by focusing on the collection at Museum Fünf Kontinente. Secondly, it is an attempt to implement a reconstruction study of the Japan exhibitions held by Siebold himself using the collection through a detailed examination of extant artifacts and reference materials in both Japanese and European languages. In short, the intention is to introduce Siebold's exhibitions 150 years ago nested within the Museum's exhibition.

The era when Siebold strived to establish a Japan museum coincides with the dawn of modern

museums and it could be said that his theory was extremely innovative and advanced for his time. Today, museum exhibitions are commonly encountered within the cultural lives of the people. However, there is undoubtedly still much room for their further development as a means of education linked to the reflection of the leading-edge research results or the discovery and utilization of valuable historical materials that still lie dormant in various places. In the new project of the National Institutes for the Humanities, *Insights into Japan-Related Overseas Artifacts and Documents of the 19th Century in Europe through Research and Use: Developing the Foundation for International Collaboration in Transmitting Japanese Culture*, launched in April, research will be developed bearing in mind such issues as how to use surveys and research in 19th-century Japanese collections located in Europe and how to activate Japan research both in Japan and abroad. I hope that the Museum's exhibition and this symposium will serve as a significant start in such research activities.

エドム＝フランソワ・ジョマールとの書簡交換からみた

民族学及び民族学博物館に関するシーボルトの見解

ブルーノ・リヒツフェルト（五大陸博物館）

長年、シーボルト研究では、日本に関する研究者としてのフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの業績及び後期徳川時代の日本文化の研究のためのコレクションの評価ばかりに主眼が置かれ、彼の博物館理論家そして民族学博物館設立の立案者としての重要性についてはあまり注目されてこなかった。

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは1835年、バイエルン王ルートヴィッヒ I 世に宛てた書簡の中で、民族学の課題及び民族学博物館設立の必要性を述べた。彼は、パリの民族学博物館設立に尽力していたエドム＝フランソワ・ジョマール（1779～1862）に宛てた1843年の書簡の中でも、このことに言及し主張している。シーボルトはパリのジョマールの元を訪れたが、話の要旨は同書簡に関することであった。ジョマールは2年後にようやく、「民族誌的コレクションに関してフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトに宛てた A. M. Ph.-Fr. de Siebold sur les Collections Ethnographiques」書状で回答し、シーボルトの書簡に記述されている考えを再度まとめた。両書簡はフランス語版で1843年及び1845年にパリで印刷され頒布されたが、エルネスト＝テオドール・アミー（1842～1908）がこれを読み、1890年に、パリで刊行した論稿「民族誌博物館の起源。歴史と記録 Les Origines du Musée d'Ethnographie. Histoire et Documents」で取り上げている。ただし、筆者の知る限りでは、同氏の研究では両書簡の詳細な分析は行っていない。（アミーはジョマールの後継者であり、1880年に竣工したトロカデロ民族誌博物館の初代館長であった。彼のコレクションは、現在、人類博物館及びケ・ブランリ美術館に展示されている。）

エドム＝フランソワ・ジョマールはエジプト学者であると同時に地理学者で、学者の立場でナポレオンのエジプト遠征（1798～1801）に同行している。1804～1814年、同遠征の学術結果をまとめた「エジプトの記述 Description de L'Égypte」の執筆を依頼されたが、同著書は長期にわたって欧州におけるエジプト像を決定するものとなった。1821年、共同設立者として地理学会（Société de géographie）を設立し、1848年、その会長に就任した。1828年、パリ王室図書館に地図・図面部門を創設し、その管理責任者に就任し、1839年上級司書となった。ジョマールは、アフリカ研究の同分野における当時の権威者であり、同図書館の民族誌的コレクションに多大な尽力を注ぎ、そのための理論的計画も立案した。

1843年、シーボルトがジョマールに宛てた書簡のタイトルは、「世界の各地域に植民地又は貿易関係を有する欧州諸国における民族誌博物館の利用及びその設備の有益性に関して Sur l'utilité des musées ethnographiques et sur l'importance de leur création dans les états européens qui possèdent des

colonies ou qui entretiennent des relations commerciales avec les autres parties du monde」であった。シーボルトは、同書簡の中で、特に考古学と民族学の間での役割分担に言及し、ジョマールの文化を比較して見せる展示コンセプトについても詳述した上で、地理学的区分に基づく彼独自の展示コンセプトと対比し、両コンセプトを相互に慎重に検討している。

ジョマールの意図は、楽器、農具、家事道具などの文化的に重要な対象物を収集し、そのつど系統立てて整理することにより、様々な加工方式や品質を認識し、さらには文化進化論も併せて考慮して、各民族や種族の文明開化レベル及び共通点や差異を認識するというものであった。そこでは、地理学的原産や区分は副次的な役割しか果たしえない。ジョマールは、比較文学的手法を用いて結果に至る民族学及びその時々々の個々の文化を学術的に詳述する民族誌学に適宜言及している。

これに対してシーボルトは、民族移動により数千年にわたって分裂し、相互に引き離されてしまった全ての民族の共通の起源を端緒としている。各民族及び種族の共通点だけでなく、歴史的進展をも再現することが可能な科学の課題に関して、シーボルトは、考古学及び民族誌学、民族学のそれぞれの役割を以下のように明確に示している。考古学は遺物を用いて消滅してしまった歴史的な文化だけでなく、現存する文化の過去をも探求する学問である。民族誌学は文化の現状を詳述、探求し、欧州人との接触による変遷が生じる前に、できる限り多くを記録し救い出す学問である。民族学は、各種族の依存性、接触及び民族移動並びにその文化的進展に関する確証を得るために、全ての文化財産を比較する学問である。考古学及び民族誌学、民族学、さらにそれらの分野に関わる博物館は相互に親密に補完そして影響しあうものであるとしている。

シーボルトの考えによれば、植民地又は欧州圏外の民族と密接な接触を有する諸国においては、民族学博物館がそのコレクションを原産地ごとに分類し、地理学的区分に従って展示することは不可欠である。彼は、比較文化的視点に従って対象グループを展示する考え方を拒んでいる。その理由は、地理学的視点に従って展示された民族学博物館のみが、学識者や研究者、役人、軍人、外交員又は退職官吏が、当該諸国への渡航や送付前に当該国の状況や製品の明確なイメージを描くのに有益であり、一般大衆もまた対象地域に関する適切な概要を知ることができるからである。こうした基礎知識のおかげで、より理解を深めた上で、当該文化の担い手に接することができる。芸術家や製作者は自国に居ながらにして、展示された製品を見て、インスピレーションを得ることができるが、この関連性において、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、中国の製品が18世紀のヨーロッパにいかに大きな影響を与えたかを指摘している。このためシーボルトは、地理的区分に基づく展示こそが、興味を持って訪れる民族学博物館来館者に対し、考えうる最大の利益をもたらすものと期待したのである。

Siebold's views on ethnology and ethnological museums in his correspondence with Edme-Francois Jomard

Bruno J. Richtsfeld
(Museum Fünf Kontinente)

For a long time, the research of the Siebold–Foundation focused most of all on Philipp Franz von Siebold's activity as a Japanologist and the evaluation of his collections for the study of Japanese culture in the later Tokugawa era. Less focus was directed towards his relevance as a theorist of museums and provider of ideas for the foundation of ethnological museums.

In 1835, Philipp Franz von Siebold stated his ideas on the tasks of ethnology and the necessity of the setup of ethnological museums in a memorandum to the Bavarian King Ludwig I. In 1843, he specified these ideas and expanded them in a letter to Edme-Francois Jomard (1777-1862), who was pursuing the foundation of an ethnological museum in Paris. Siebold had visited him in Paris, and his letter is a summary of their talks. Jomard answered it only two years later with the letter *A M. Ph.-Fr. de Siebold sur les Collections Ethnographiques* (To Mr Ph.-Fr. von Siebold regarding the ethnographical collections), in which he again summarized his thoughts. Ernest- Théodore Hamy (1842-1908) included these two letters in French, which were printed and distributed in Paris in 1843 and 1845, in his publication “Les Origines du Musée d’Ethnographie. Histoire et Documents “(The origins of the Ethnographical Museum. History and documents), which was published in Paris in 1890; as far as I can see both documents have not been analysed further by the research. (Hamy was Jomard's successor and the first director of the Musée d’Éthnographie du Trocadéro, which was inaugurated in 1880. Today his collections are spread over the Musée de l’Homme and the Musée du Quai Branly.)

Edme-Francois Jomard was Egyptologist and geographer and participated as a scientist in Napoleon's Egypt-expedition (1798-1801); from 1804 to 1814 he was assigned to publish the work *Description de L'Égypte*, which summarized the scientific results of the expedition and defined Europe's image of Egypt for a long time. In 1821, he was the co-founder of the Geographical Society (*Société de géographie*), whose president he became in 1848. In 1828, he established the Department for Maps and Plans at the Royal Library of Paris and became its curator, and in 1839 he became chief librarian. He was one of the authorities of his time in the area of African studies and vehemently supported an ethnographic collection at this library, for which he also drafted a theoretical plan.

Siebold's letter to Jomard of 1843 is titled *Sur l'utilité des musées ethnographiques et sur l'importance de leur création dans les états européens qui possèdent des colonies ou qui entretiennent des relations*

commerciales avec les autres parties du monde (About the benefit of ethnographical museums and the significance of their establishment in the European states which have colonies or maintain trading relations with the remaining parts of the world). Therein Siebold elaborates in particular on the distribution of tasks between archaeology and ethnology and discusses Jomard's concept of a culture-comparing presentation of an exhibition, to which he contrasts his own concept of an exhibition of a geographic classification and in which he balances pros and cons of both concepts.

It was Jomard's idea to collect important objects, e.g., musical instruments, agricultural devices, appliances of the household domain, etc., and to arrange them in respective lines in order to reveal the diverse ways of handling and qualities and also, with culture-revolutionary methodology, to understand the level of civilisation of the individual peoples and tribes as well as similarities and variations. The geographical origin and classification was to play only a secondary role. Accordingly, Jomard talks about ethnology, which obtains results by the comparative method, and ethnography for the scientific description of each individual culture.

On the other hand, Siebold assumes a common origin of all peoples who split and separated themselves from each other by migration flows over thousands of years. He assigns the task of science, i.e., to reconstruct these common features but also the historical development of the individual peoples and ethnical groups, to archaeology and ethnography/ethnology: Archaeology is responsible for historic and vanished cultures, but also for researching the past of living cultures with the aid of their relicts. Ethnography describes and researches the present condition of cultures and tries to document and save as much as possible before alteration by contact with Europeans has an impact. Ethnology compares all cultural assets in order to obtain evidence of the dependencies, contacts and migration flows of the individual tribes as well as their cultural development. Archaeology and ethnography/ethnology as well as their respective museums complement and require each other to the minutest detail.

According to Siebold's opinion, it is indispensable for countries with colonies, respectively with intensive contacts with non-European peoples, that the ethnological museums split their collections according to the areas of origin and exhibit them geographically arranged. He rejects the idea of exhibiting the object groups according to cross-cultural aspects. This is because only a geographically arranged ethnological museum is of use for scholars and researchers, officials, military personnel, traders and missionaries before their journey or deportation to the respective countries to obtain a clear image of the conditions and products of them, and the general public can obtain a good overview of the respective areas. Owing to this preparatory education, they will meet bearers of those cultures with more understanding. Artists and producers at home can be inspired by the products on display: In this context Philipp Franz von Siebold points out what a great influence was exerted by Chinese products in Europe of the 18th century. Consequently, Siebold expects maximum benefit from a geographical arrangement for the interested visitor of ethnological museums.

Siebolds Ansichten über Völkerkunde und Völkerkunde-Museen im Schriftwechsel mit Edme-Francois Jomard

Bruno J. Richtsfeld
(Museum Fünf Kontinente, München)

Lange Zeit richtete sich das Augenmerk der Siebold-Forschung vor allem auf Philipp Franz von Siebolds Tätigkeit als Japanforscher und die Auswertung seiner Sammlungen für das Studium der japanischen Kultur der späten Tokugawa-Zeit. Weniger Augenmerk richtete man auf seine Bedeutung als Museumstheoretiker und Ideengeber für die Gründung von völkerkundlichen Museen.

In einer Schrift an den bayerischen König Ludwig I. legte Philipp Franz von Siebold 1835 seine Vorstellungen über die Aufgaben von Völkerkunde und die Notwendigkeit der Einrichtung von Völkerkundemuseen dar. Diese Vorstellungen präzisierte und führte er weiter in einem Schreiben von 1843 an Edme-Francois Jomard (1777–1862), der in Paris die Gründung eines Völkerkundemuseums betrieb. Siebold hatte ihn in Paris besucht, sein Schreiben ist ein Resümee ihrer Gespräche. Jomard antwortete darauf erst zwei Jahre später mit dem Schreiben *A M. Ph.-Fr. de Siebold sur les Collections Ethnographiques* (An Hrn. Ph.-Fr. von Siebold betreffs der ethnographischen Sammlungen), in dem er noch einmal seine Gedanken aus dieser Schrift zusammenfasste. Diese beiden Schreiben in französischer Sprache, die 1843 und 1845 in Paris gedruckt und verbreitet wurden, nahm Ernest-Théodore Hamy (1842–1908), 1890 in seine in Paris erschienene Publikation „Les Origines du Musée d’Ethnographie. Histoire et Documents“ (Die Ursprünge des Ethnographischen Museums. Geschichte und Dokumente) auf; soweit ich erkennen kann, wurden beide Schriften nicht mehr näher von der Forschung analysiert. (Hamy war Jomards Nachfolger und erster Direktor des Musée d’Éthnographie du Trocadéro, das 1880 eingeweiht wurde. Seine Sammlungen verteilen sich heute auf das Musée de l’Homme und das Musée du Quai Branly.)

Edme-Francois Jomard war Ägyptologe und Geograph und nahm als Wissenschaftler an Napoleons Ägypten-Expedition (1798–1801) teil; 1804–1814 war er mit der Herausgabe des Werkes *Description de L’Égypte* beauftragt, das die wissenschaftlichen Ergebnisse dieser Expedition zusammenfasste und das Ägyptenbild Europas für lange Zeit bestimmte. 1821 war er Mitbegründer der Geographischen Gesellschaft (*Société de géographie*), deren Präsident er 1848 wurde. Er schuf 1828 an der königlichen Bibliothek zu Paris die Abteilung für Karten und Pläne, wurde deren Kustos und 1839 Oberbibliothekar. Er war eine der Autoritäten seiner Zeit auf dem Gebiet der Afrika-Studien und setzte sich vehement für eine ethnographische Sammlung an dieser Bibliothek ein, wofür er auch den theoretischen Plan entwarf.

Siebolds Schreiben an Jomard von 1843 trägt den Titel *Sur l'utilité des musées ethnographiques et sur l'importance de leur création dans les états européens qui possèdent des colonies ou qui entretiennent des relations commerciales avec les autres parties du monde* (Über den Nutzen von ethnographischen Museen und über die Bedeutung ihrer Einrichtung in den europäischen Staaten, die Kolonien besitzen oder Handelsbeziehungen zu den übrigen Teilen der Welt unterhalten). Siebold geht darin insbesondere auf die Rollenverteilung zwischen Archäologie und Ethnologie ein und setzt sich mit Jomards Konzeption einer kulturvergleichenden Ausstellungspräsentation auseinander, der er seine eigene Ausstellungenkonzeption einer geographischen Aufteilung gegenüberstellt und beide Konzeptionen gegeneinander abwägt.

Jomards Idee war es kulturell wichtige Objekte zu sammeln, z.B. Musikinstrumente, landwirtschaftliche Geräte, Geräte des häuslichen Bereichs usw., und jeweils Reihen zu bilden, um so die unterschiedlichen Bearbeitungsweisen und Qualitäten zu erkennen und damit auch mit kulturevolutionistischer Methodik die zivilisatorische Höhe der einzelnen Völker und Stämme sowie die Gemeinsamkeiten und Variationen zu erkennen. Erst in zweiter Linie sollte dabei auch die geographische Herkunft und Einteilung eine Rolle spielen. Entsprechend spricht Jomard von Ethnologie, die mittels der komparatistischen Methode zu Ergebnissen kommt, und der Ethnographie für die wissenschaftliche Beschreibung jeweils einer einzelnen Kultur.

Siebold hingegen geht vom gemeinsamen Ursprung aller Völker aus, die sich über Jahrtausende hinweg durch Wanderbewegungen aufgesplittert und voneinander getrennt haben. Die Aufgabe der Wissenschaft diese Gemeinsamkeiten, aber auch die geschichtliche Entwicklung der einzelnen Völker und Völkerschaften wieder rekonstruieren zu können, weist er der Archäologie und Ethnographie/Ethnologie zu: Die Archäologie ist für die historischen und verschwundenen Kulturen, aber auch für die Erforschung der Vergangenheit der lebenden Kulturen anhand ihrer Relikte zuständig. Die Ethnographie beschreibt und erforscht den gegenwärtigen Zustand von Kulturen und versucht so viel als möglich zu dokumentieren und zu retten, bevor der Wandel durch den Kontakt mit den Europäern eintritt. Die Ethnologie vergleicht alle Kulturgüter, um zu Aussagen über die Abhängigkeiten, Kontakte und Wanderungen der einzelnen Völkerschaften sowie deren kulturelle Entwicklung zu kommen. Archäologie und Ethnographie/Ethnologie sowie ihre entsprechenden Museen ergänzen und bedingen einander auf das engste.

In Ländern mit Kolonien bzw. mit intensiven Kontakten zu außereuropäischen Völkern ist es nach Siebolds Meinung unabdingbar, dass die Völkerkundemuseen ihre Sammlungen nach Herkunftsgebieten trennen und nach geographischer Einteilung aufstellen. Den Gedanken, die Objektgruppen nach kulturvergleichenden Gesichtspunkten auszustellen, verwirft er. Denn nur ein nach geographischen Gesichtspunkten aufgestelltes Völkerkundemuseum ist von Nutzen für die Gelehrten und Forscher, Beamte, Militärs, Handelsreisenden oder Missionare, sich vor ihrer Reise oder Verschickung in die jeweiligen Länder ein klares Bild von den Zuständen und den Produkten derselben zu machen und

das allgemeine Publikum kann sich einen guten Überblick über die in Frage kommenden Gebiete verschaffen. Dank dieser Vorbildung werden sie den Trägern dieser Kulturen mit mehr Verständnis begegnen. Künstler und Produzenten zu Hause können sich durch die ausgestellten Produkte inspirieren lassen: In diesem Zusammenhang weist Philipp Franz von Siebold darauf hin, welchen großen Einfluss chinesische Produkte im Europa des 18. Jahrhunderts ausübten. Von einer geographischen Aufstellung verspricht sich Siebold daher den größtmöglichen Nutzen für den interessierten Besucher von Völkerkundemuseen.

報告 1

シーボルト・コレクション中の長崎関係資料について

原田 博二 (長崎純心大学)

今回の調査で明らかとなった長崎関係資料の代表的なものが、岳宗元章題鉄心道胖画像（1面S1478）である（図1）。同画像は、聖福寺の開山（初代住職）鉄心道胖の画像で、画者印や年紀はないが、同寺4代住職岳宗元章の題がある。その題には、「寶永七年歲次庚寅春三月吉旦 傳臨濟三十五世嗣法徒岳宗璋謹題」とあるので、1710（宝永7）年に書かれたものである。

また、同画像は、現在、額装になっているが、隠元自題隠元隆琦（1592～1673）画像（S1477）、木庵自題木庵性瑫（1611～84）画像（S1479）（図2）とともに（ともに現在は額装）、3幅対（中幅・隠元画像、右幅・木庵画像、左幅・鉄心画像）であった。

ところで、この鉄心画像については、当初は誰を描いたものか判断がつかなかったため、仮に「某僧画像」とした。隠元画像、木庵画像と3幅対であり、しかも隠元



図1 鉄心画像（部分）S1478



図2-1 鉄心画像 S1478



図2-2 隠元画像 S1477



図2-3 木庵画像 S1479

画像と木庵画像には「長」の印がある(図3)。この「長」の印は、「隠元かきの長兵衛」と伝えられる喜多道矩(?～1663)のことである。それだけにこの某僧画像もただものではないと思われた。

通常、3幅対は中幅が最上格で、右幅がその次ぎ、左幅がさらにその次ぎの順である。隠元画像が中幅なのは、隠元が黄檗宗の宗祖だからである。木庵が左幅でなく右幅であるのは、木庵が紫雲派の祖であるからであろう。そうすると、この某僧画像は紫雲派に属する僧ということになる。そこで、岳宗が書いた題(図4)を読むと、そのなかに「長崎生まれ」「聖福寺を開く」「紫雲(木庵)の嫡子(嗣法徒)」などとある。聖福寺を開創したのは、長崎の生まれで、木庵の嗣法徒鉄心であり、しかも岳宗が鉄心の嗣法徒であることなどから、この某僧画像は鉄心の画像と判明したのである。もっとも、聖福寺に所蔵されている鉄心画像(図5)に比べてわかったことであるが、この画像は鉄心の壮年期のころを描いたものである。

鉄心道胖(1641～1710)は、中国人陳朴純と長崎の女性西村氏の間生まれ、後に出家、1677(延宝5)年長崎に聖福寺を開創、開山(初代住職)となった。1679(延宝7)年木庵に嗣法(34世)、1705(宝永2)年以降、江戸の瑞聖寺(東京都港区白金台)の住職を兼ね、1710(宝永7)年示寂した(70歳)。岳宗元章(1686～1744)の詳細は不明であるが、1706(宝永3)年鉄心に嗣法(35世)、1710(宝永7)年以降、末庵四休庵の庵主となったが、1718(享保18)年には聖福寺4代住職に就任、1744(延享元)年まで在住、同年、示寂した(59歳)。



図3 「長」印

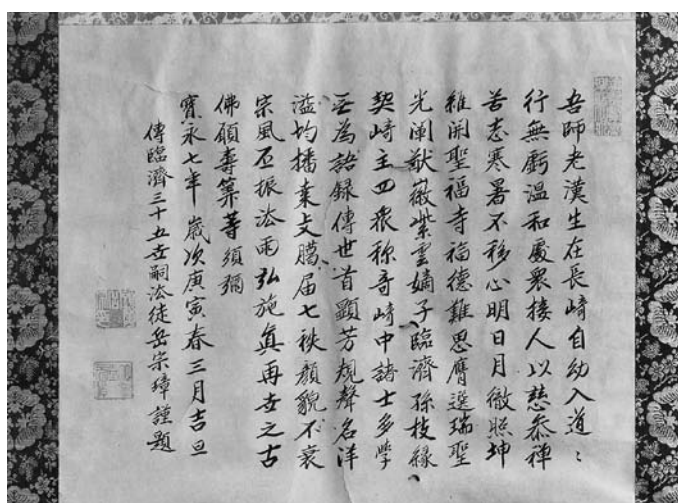


図4 「鉄心画像」の岳宗題



図5 聖福寺蔵「鉄心画像(部分)」

このように隠元と木庵の画像、それも道矩の印のある画像は、当時としても非常に貴重で、これら画像を所蔵する寺院は相当の格式を有する寺院に限られた。現在、これらの画像には旧蔵者などを示す情報は失われているが、鉄心の画像に岳宗の題があることから、この画像は、鉄心が開創、岳宗が2代庵主となった聖福寺の末庵四休庵にあったものと思われる。四休庵は、聖福寺の山門の西側にあったもので、1686（元禄元）年鉄心が開創、鉄心の示寂後、岳宗が再興、以後、聖福寺の末庵として重きをなした。これらの画像も、四休庵の什物とされたが、幕末期、同庵が経済的に困窮するにともない外部に流出、1859（安政6）年再来日したシーボルトの所有するところとなったものと思われる。

なお、これらの画像は、今回の調査で隠元、木庵、鉄心のものと確認されるまでは、ミュンヘン五大陸博物館でも誰の画像か不明としていた。さらに同館にはシーボルトの長男アレクサンダー・シーボルトのリストがあり、それには、S1477には「Semsja宗《黄檗宗カ》の開祖」、S1478には「日本で最初に僧籍を得た帝の息子」（前述のように、鉄心は帝の子ではない）、S1479には「有名な高僧」（『五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクション関係史料集成』国立歴史民俗博物館 161頁）とあるだけで、アレクサンダーも、当の父シーボルトも、これらの3人の画像が誰であるか認識していなかったのである。

シーボルトのコレクションには、多数の文書や書籍類があるが、そのうちの一つに『骨董集』和装本1冊（S1207）がある。同書は、醒齋老人の著述で、1815（文化12）年大坂の塩谷長兵衛と江戸の鶴屋喜右衛門が刊行したものであるが、「榮壽堂」（朱印）、「縫米」（朱印）の蔵書印がそれぞれ捺されている（図6）。

また、表紙の裏には「長崎引地町萬貸□」（黒印）、「長崎榎津町貸本所赤瀬店」（黒印）が捺されているが、いずれも貼紙があり、「長崎引地町萬貸□」の□の部分に「長崎酒屋町貸本所縫屋米吉」（黒印）が捺されている（図7）。蔵書印の「榮壽堂」については不明であるが、「縫米」については、黒印の「縫屋米吉」のことである。この酒屋町（長崎市栄町）の縫屋米吉の詳細は不明であるが、同じ酒屋町には、1827（文政10）年に万屋町の傘鉾垂（長崎市指定有形文化財）を制作した縫師縫屋幸助（初代）が居住、米吉はその子、



図6 『骨董集』の「榮壽堂」「縫米」印

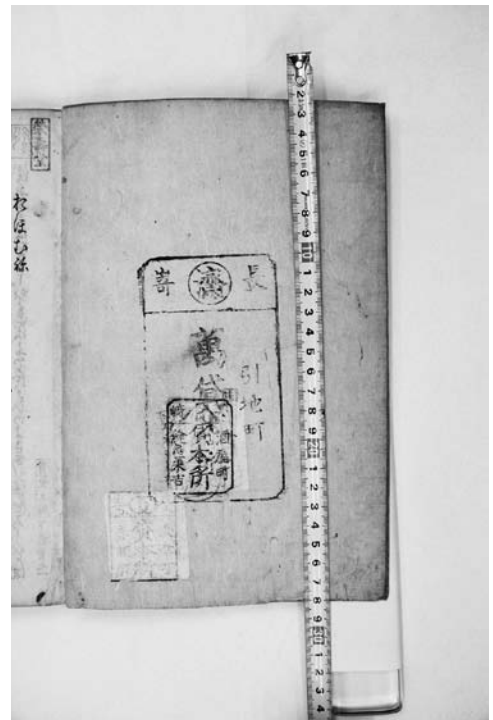


図7 『骨董集』の「萬貸□」「赤瀬店」「縫屋米吉」印

もしくは家族と思われる。

ちなみに、縫屋2代を相続した鶴野熊吉（久間吉）の子松田源五郎が第十八国立銀行、現在の地銀（株）十八銀行の創立者（初代頭取）である。また、黒印の「榎津町赤瀬店」は長崎の赤瀬家である。赤瀬家は、始祖甚助以来、榎津町（長崎市万屋町）で質商を営むなど、明治から昭和の長崎を代表する豪商であった。

このように、後に長崎を代表するような豪商が揃って貸本業を営んでいることは、当時の書籍の流通などを考える点で注目される。

また、『重田玄泰著論語略解一』から『重田玄泰著論語略解 三』の和装本3冊（S1194a～c）には「長崎酒屋町笠戸印章」（朱印）「汲古」（朱印）の蔵書印が捺されているが（図8）、『岩崎灌園著草木育種上』と『岩崎灌園著草木育種下』の和装本2冊（S1168a・b）にも、「汲古」（朱印）「長崎笠戸正胤圖書」（朱印）の所蔵印が捺されている（図9）。この「長崎酒屋町笠戸印章」も「長崎笠戸正胤圖書」もともに「汲古」の印章があることから同一人物で、酒屋町の笠戸正胤のことである。

ちなみに、立教大学の創立者C・M・ウイリアムズ（1829～1910）と、明治学院の理事長などを務めたG・H・フルベッキ（1830～1898）は、幕末期、ともに長崎に滞在したが、古賀十二郎著『徳川時代に於ける長崎の英語研究』（九州書房、1947年、83、87頁）に笠戸順節という酒屋町の漢方医がウイリアムズやフルベッキに日本語や日本に関する書籍を供給したとあるので、



図8-1 『論語略解』の「汲古」印

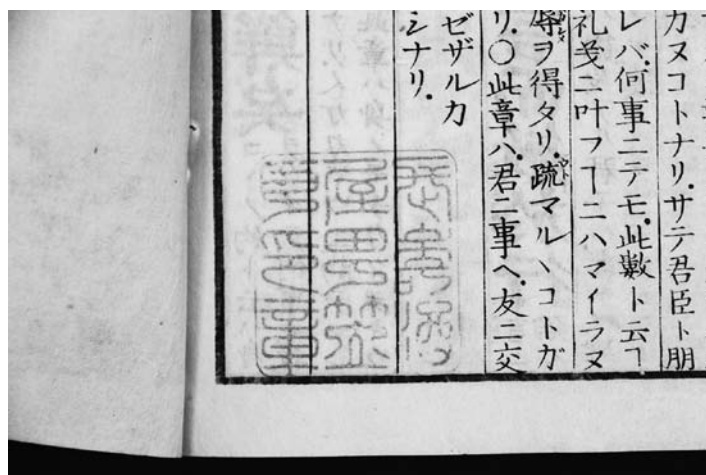


図8-2 『論語略解』の「長崎酒屋町笠戸印章」印

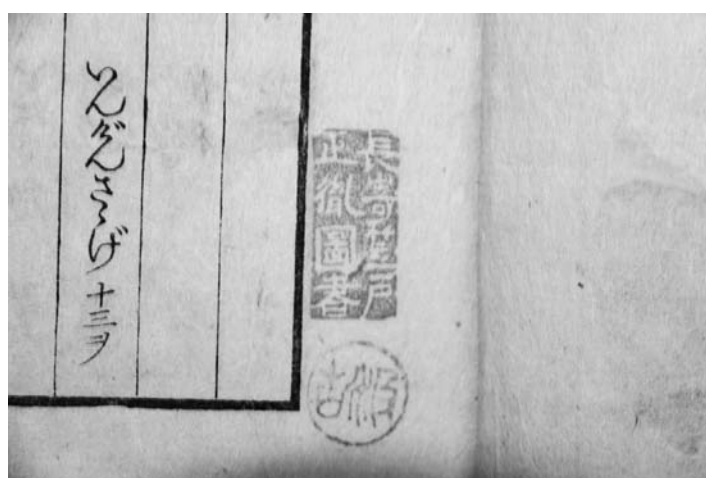


図9 『草木育種 下』の「長崎笠戸正胤書」「汲古」印

この正胤と順節は同一人物と思われる。

同じく酒屋町関係として位牌3基 (S829i・S829k・829a、今回は展示されていない)、天神像(1基S973)があり(図10)、位牌の底部にともに「長崎酒屋町佛師」の(図11)、天神像の底部にも「酒屋町九臯斎」の墨書がある(図12)。また、このうちの1基(S829a)の背面には「天保十二年丑閏五月十日 俗名亀太郎」(朱筆)、底部に「四」の墨書があることから、これらの位牌は、幕末期のもので、天神像の墨書から仏師の一人が九臯斎という名前であったこともわかったのである。

これらとは別に、高見氏夫妻の位牌1基(S829g)がある(今回は展示されていない)。この位牌には表面は「長生院 菜譽壽蓬素仙居士 不老院 蓬譽壽松素榮大姉」と刻まれ(図13)、裏面は略、底部には「四十二」の墨書がある。この「四十二」の墨書からこの高見氏夫妻の位牌も酒屋町の仏師の作になるもので、ほかの位牌と同様、廃棄されたものが、シーボルトの所有するところとなったものと思われる。

これらの資料をシーボルトに提供したり、情報を与えたのは、ウイリアムズやフルベッキの時と同様、笠戸順節と思わ



図10 「天神像」 S973



図11 位牌底部の墨印「長崎酒屋町佛師」



図12 天神像底部の墨書「酒屋町九臯斎」



図13 高見氏夫妻位牌

れる。順節は、シーボルトとも親しく交流、酒屋町関係のものはもとより、その他の資料についても提供、シーボルトの資料収集に貢献したのである。

以上、ご紹介したように、これら長崎関係の資料は、シーボルトが収集した経緯や旧蔵者が知られるものが含まれるなど、実に貴重で興味深いものである。今後さらなる調査研究が期待される。

(註) 図1～4、図6～13はミュンヘン五大陸博物館所蔵。

Report 1

Nagasaki-related materials in the Siebold Collection

Hiroji Harada

(Nagasaki Junshin Catholic University)

The most notable example of Nagasaki-related materials ascertained from the latest research was the portrait of Dōhan Tesshin entitled by Genshō Gakushū (1 piece, S1478) (Fig. 1). Dōhan Tesshin, the subject of the portrait, founded Shōfukuji Temple and became the first chief priest. Although the painting bears neither the artist's seal nor date, we know from the title "Fourth Chief Priest Genshō Gakushū of Shōfukuji Temple" with an inscription "Seventh year of Hōei (1710), March, Spring – Title attributed to Shō Gakushū, 35th generation Rinzai zen master" that it was produced in 1710.

Furthermore, we know that the portrait was originally part of the three scrolls (presently framed individually) together with the self-entitled portrait of Ryūki Ingen (1592~1673) (S1477) and the self-entitled portrait of Shōtō Mokuan (1611~84) (S1479) (Fig. 2), which formed a triplicity (center: Ingen image, right: Mokuan image and left: Tesshin image).

At first, this portrait of Tesshin was temporarily described as "Unknown priest" since nobody knew who the subject was. They knew, however, that it was part of the triplicity with the images of Ingen and Mokuan, both of which bearing the artist's seal impression *Chō* (Fig. 3). And since this *Chō* seal belongs to Dōku Kita (?~1663), known as "Ingen painter Chōbei.," the unknown priest was considered to be an important figure.

In general, the center scroll of a triplicity has the highest rank, followed by the right and the left scrolls. The portrait of Ingen was placed in the center because he was the founder of the Ōbaku sect while that of Mokuan was placed on the right instead of the left probably due to the fact that he was the founder of the Shiun School. With this in mind, it is safe to say that the unknown priest must have belonged to the Shiun School. The title by Gakushū (Fig. 4) includes phrases such as "born in Nagasaki," "founder of Shōfukuji Temple" and "son (disciple) of Shiun (Mokuan)." The unidentified subject of the portrait was finally confirmed to be Tesshin from the facts that he was born in Nagasaki and founded Shōfukuji Temple, as well as from the fact that Gakushū was a disciple of Tesshin. It was also found that this painting portrays Tesshin in his younger days by comparing it with his portrait possessed by Shōfukuji Temple (Fig. 5).

Dohan Tesshin (1641-1710) was the son of a Chinese man named Chin Boku jun and a woman of the Nishimura family in Nagasaki. He later became a priest, founded Shōfukuji Temple in Nagasaki in 1677 and became its first chief priest. In 1679, he studied with Mokuan (34th generation) and, from 1705, also served as the chief priest of Zuishōji Temple (Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo) until he died in 1710

at the age of 70. Details are unknown about Genshō Gakushū (1686-1744) except for the fact that he studied with Tesshin (35th generation) and that from 1710 he served as the priest of Shikyūan, a branch of Shōfukuji Temple, before he assumed the position of the fourth main priest at Shōfukuji Temple in 1718. He resided there until he died in 1744 at the age of 59.

The portraits of Ingen and Mokuan bearing Dōku's seal would have been highly valuable even at the time and possession of these paintings would have been limited to temples of considerable high rank. Today no information remains regarding the previous owners of the paintings. Given the fact that the image of Tesshin was entitled by Gakushū, however, it is considered that the portrait of Tesshin, together with those of Ingen and Mokuan, was in the possession of Shikyūan a branch of Shōfukuji Temple where Tesshin founded, and Gakushū served as the second priest. Shikyūan used to be located on the west side of the main gate of Shōfukuji Temple. It was founded in 1686 by Tesshin and, after his death, restored by Gakushū. It was subsequently held in high esteem as the main branch of Shōfukuji Temple. The paintings belonged to Shikyūan until the late Edo period when they had to be sold off due to severe economic distress. This was probably how the paintings came to be in the hands of Siebold who visited Japan for the second time in 1859.

Even Museum Fünf Kontinente did not know who the subjects of the pictures were until it was confirmed through the present survey that they were Ingen, Mokuan and Tesshin. Furthermore, the list produced by Alexander Siebold, the eldest son of Philipp Franz Siebold, and kept at the Museum, indicates no more than “founder of the Semsja school of Buddhism (Signify Obaku sect?)” for S1477, “son of an emperor who was the first to acquire priesthood in Japan” for S1478, (as mentioned earlier, Tesshin was not the son of an emperor), and, for S1479, “a famous high-ranking priest (*Compilation of Historical Materials from the Five Continents Museum's Siebold Collection*, National Museum of Japanese History, p. 161),” revealing that not only Alexander but also his father Philip Siebold were unaware of the identity of the subjects of the paintings.

The Siebold collection contains many papers and documents, among which is a book written by Elderly Seisai titled *Kottōshū* (=Collection of essays) single volume, Japanese-style binding (S1207). It was published in 1815 by Chōbē Shiotani in Osaka and Kiemon Tsuruya in Edo and it bears the ownership seals of Eijudo (red ink) and Nuiyone (red ink) (Fig. 6).

The back of the front cover bears the inscription “Nagasaki, Hikiji-Machi, Yorozu Kashi (=rental shop) □” (black ink) and “Nagasaki Enokizu-machi, Kashihonjo (=book rental shop), Akase Mise” (black ink). In both cases, a piece of paper is attached and the seal inscribed “Nagasaki Sakaya-machi, Kashihonjo, Nuiya Yonekichi” (black ink) is affixed on the □ (square) portion of “Nagasaki, Hikiji-Machi, Yorozu Kashi □” (Fig. 7). Although the ownership seal of Eijudo is unknown, Nuiyone is an abbreviated form of the name Nuiya Yonekichi of the black seal. Details are not known about Yonekichi Nuiya of Sakaya-machi

(currently known as Sakae-machi, Nagasaki), but the embroidery master Kōsuke Nuiya (1st generation) who produced *kasaboko-dare* = (hangings for portable shrines) (listed as a tangible cultural property of Nagasaki City) for Yorozuya-machi, resided in Sakaya-machi in 1827 and Yonekichi is thought to be his son or family member.

Incidentally, Gengorō Matsuda, the son of Kumakichi Tsuruno, who succeeded Kōsuke Nuiya as the second-generation, was the founder (first president) of the Eighteenth National Bank, a regional bank currently known as the Eighteenth Bank, Limited. The black seal impression of “Enokizu-machi Akase Mise” (=Enokizu-machi Akase Shop) is a reference to the Akase family in Nagasaki. After Jinsuke established his business, the family was involved in pawnshop business in Enokizu-machi (currently Yorozuya-machi, Nagasaki), and was a well-known wealthy merchant family active in Nagasaki from the Meiji period through the Showa period.

Thus, when considering the distribution routes of books at that time, it is worth noting that wealthy merchant families in Nagasaki were involved in the book-rental business.

In addition, the three-volume book *Shigeta Gentai Cho Rongo Ryakukai* (=Analysis of the Analects of Confucius by Gentai Shigeta) with Japanese-type binding (S1194a-c) bears the owner’s seals of “Nagasaki Sakaya-machi Kasado Inshō” (red ink) and “Kyūko” (red ink) (Fig. 8), while the two-volume work *Iwasaki Kan’en Cho Sōboku Ikushu* (=Plant Cultivation by Tsunemasa Iwasaki) with Japanese-style binding (S1168a, b) has the owner’s seals of “Kyūko” (red ink) and “Nagasaki Masatane Kasado Zusho” (red ink) (Fig. 9). Both “Nagasaki Sakaya-machi Kasado Insho” and “Nagasaki Masatane Kasado Zusho” refer to the same person since they both bear the seal impression “Kyūko,” who, specifically, was Kasado Masatane residing in Sakaya-machi.

Incidentally, both Channing Moore Williams (1829-1910), founder of Rikkyo University, as well as Guido Herman Fridolin Verbeck (1830-1898), administrative director of Meiji Gakuin University, resided in Nagasaki at the end of the Edo period. The book entitled *Research on English in Nagasaki during the Tokugawa Period* by Jūjirō Koga (pp. 83, 87, published by Kyūshū Shobō, 1947) indicates that a Chinese herbal doctor by the name of Junsetsu Kasado in Sakaya-machi supplied Williams and Verbeck with books about Japan and the Japanese language. It is, therefore, safe to say that Junsetsu and Masatane signify the same person.

Likewise as for materials related to Sakaya-machi, there are three mortuary tablets (S829i, S829k, 829a; not included in the present exhibit) and a sculpted image of Tenjin (S973) (Fig. 10). The base of the tablets carries the black-ink inscription “Nagasaki Sakaya-machi Busshi” (=Sakaya-machi, Nagasaki, sculptor of Buddhist images) (Fig. 11) while the black-ink inscription “Sakaya-machi, Kyūkosai” (Fig. 12) appears on the base of the Tenjin image. In addition, the rear surface of one of the mortuary tablets (S829a)

bears the inscription “12th year of Tenpo (1841), intercalary month May 10, secular name Kametarō” (red ink). The fact that the base of the tablet is also inscribed with the number “4” suggests that these tablets were produced in the late Edo Period. The black-ink inscription on the Tenjin image suggests that one of the sculptors involved was named Kyūkosai.

Aside from the above, there is a mortuary tablet of a couple named Takami (S829g, not included in the present exhibit). The front side reads the afterlife names of the husband and wife; “*Chōsei-in Raiyo Juhō Sosen Koji*” and “*Furō-in Hoyo Jushō Soei Taishi*” (Fig. 13). There are some characters on the back (omitted) and on the base there is the number “42” in black ink, which suggests that the couple’s tablet was also made by a Buddhist sculptor in Sakaya-machi, and that it was discarded together with the other tablets before they came into Siebold’s hands.

As in the case of Williams and Verbeck, the person who supplied Siebold with these materials was probably Junsetsu Kasado. He had an amiable relationship with Siebold and, besides the materials related to Sakaya-machi, he must have collected other materials and contributed to Siebold’s collection of materials.

The materials related with Nagasaki introduced here are extremely valuable and interesting as they reveal how Siebold acquired the items and who the previous owners were. Further research study of these articles is awaited with much anticipation.

Note: Fig. 1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12 and 13 are the Siebold collection of Museum Fünf Kontinente.

Fig. 5 is the shōfukuji collection.

報告 2

シーボルト事件と伊能日本図

— ヨーロッパに残るシーボルト関係地図資料から考える —

青山 宏夫 (国立歴史民俗博物館)

■ 1828 (文政11) 年、シーボルト事件

- ・ 幕府天文方の高橋景保がシーボルトに国禁の地図 (伊能日本図など) を渡す
- ・ 帰国間際のシーボルトの所持品のなかに国禁の地図があることが発覚
- ・ 高橋景保と関係者らへの幕府による厳しい取り調べと処罰
- ・ シーボルトへの幕府による地図の没収と国外追放

■ 高橋景保からシーボルトに渡った伊能日本図とは何か

● これまでの研究 (大谷亮吉『伊能忠敬』〔1917〕)

限られた資料 (日本側に残された資料やシーボルトの著書や文献) による推定

根拠① 縮尺 (緯度1度が約12cm = 864,000分の1) ←シーボルト著『日本』

根拠② 3枚 ← 「長崎表本多佐渡守方にてシーボルトより取上差越候品」

根拠③ 外国人にわかりやすいカナ書き

↓

シーボルトに渡った伊能日本図 = カナ書き伊能特別小図 (国立国会図書館蔵)

(ただし、シーボルトに渡ったことを直接に示す証拠を欠いていた)

● 今回の研究 (青山宏夫編『オランダ・ドイツに所在するシーボルト関係地図資料』〔2016〕)

シーボルト自身の資料による実証

← シーボルトの末裔ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家 (ドイツ・ヘッセン州) で

カナ書き伊能特別小図の写し発見

注目点① 縮尺の一致 (緯度1度が約12cm)

注目点② 海岸線の一致

注目点③ 記載事項とその位置の一致 (たとえば、国境線、山、川、国名・郡名の枠)

↓

シーボルトは、たしかにカナ書き伊能特別小図を手に入れ、写していた。それを幕府がシーボルト事件で没収したものが、現在、国立国会図書館に所蔵されているカナ書き伊能特別小図である。

■ 意義

シーボルト事件で焦点になった地図の確定 (シーボルト事件の新資料の発見)

シーボルト側に残る直接的資料による実証 (カナ書き伊能特別小図写の発見)

カナ書き伊能特別小図が実際にシーボルトに渡っていたことの実証（手交未遂説の否定）
100年越しの実証（大谷亮吉〔1917〕以来）

表1 伊能日本図と関連するブランデンシュタイン＝ツェッペリン所蔵地図資料

資料番号	資料名	備考	縦	横
22	伊能特別小図写（西日本）	オランダ語の図名。地名のアルファベット表記。一部に朱筆あり。国界・山（ケバ式）・河川の記載。朝鮮半島は山景による表現。経緯線あり（緯度1°は約12.5cm）。九州西部にメッシュ（1.4cm方格）の書き込み。トレース紙の付け足し部あり（11.9×20.9）。カナ書き伊能特別小図（国立国会図書館蔵）の写図。	66.2	87.8
23	伊能特別小図写（九州南部・四国西部）	地名はカナとアルファベット表記。一部に朱筆あり。国界・山（山景表現）・河川の記載。経緯線あり（緯度1°は約12.5cm）。九州西部にメッシュ（1.2cm方格）の書き込み。トレース紙を台紙（37.4×58.4）に貼付。カナ書き伊能特別小図（国立国会図書館蔵）の写図。資料番号24に接続。	35.5	50.5
24	伊能特別小図写（九州北部・山陰・対馬）	国界・河川の記載。朝鮮半島は山景表現。経緯線（鉛筆書きで、交点にインクで「+」を重ね書き）あり（緯度1°は約12.5cm）。下関から方位線（鉛筆書き）。トレース紙を台紙（36.4×49.5）に貼付。カナ書き伊能特別小図（国立国会図書館蔵）の写図。資料番号23に接続。	35.7	49.3
25	伊能特別小図写（西日本）（縮小）	国界・山（ケバ式）・河川の記載。朝鮮半島の記載なし。メッシュ（1.2cm方格。経緯線）。資料番号22、23、24、26の2分の1の縮尺。	34.2	31.6
26	伊能特別小図写（九州）	漢字・カナによる地名。矩形枠に国名（日向、大隅）。空白の小判型。国界・山（山景表現）・河川の記載。経緯線またはその交点に「+」の記載（緯度1°は約12.5cm）。佐多岬から黒島・硫黄島・竹島・口之永良部島・馬毛島へ延びる方位線（鉛筆の書き）。薩摩半島南端にメッシュの書き込み。トレース紙を台紙（55.7×37.8）に貼付。カナ書き伊能特別小図（国会図書館蔵）の写図。	50.7	36.6

青山宏夫編『オランダ・ドイツに所在するシーボルト関係地図資料』（2016）より抜粋

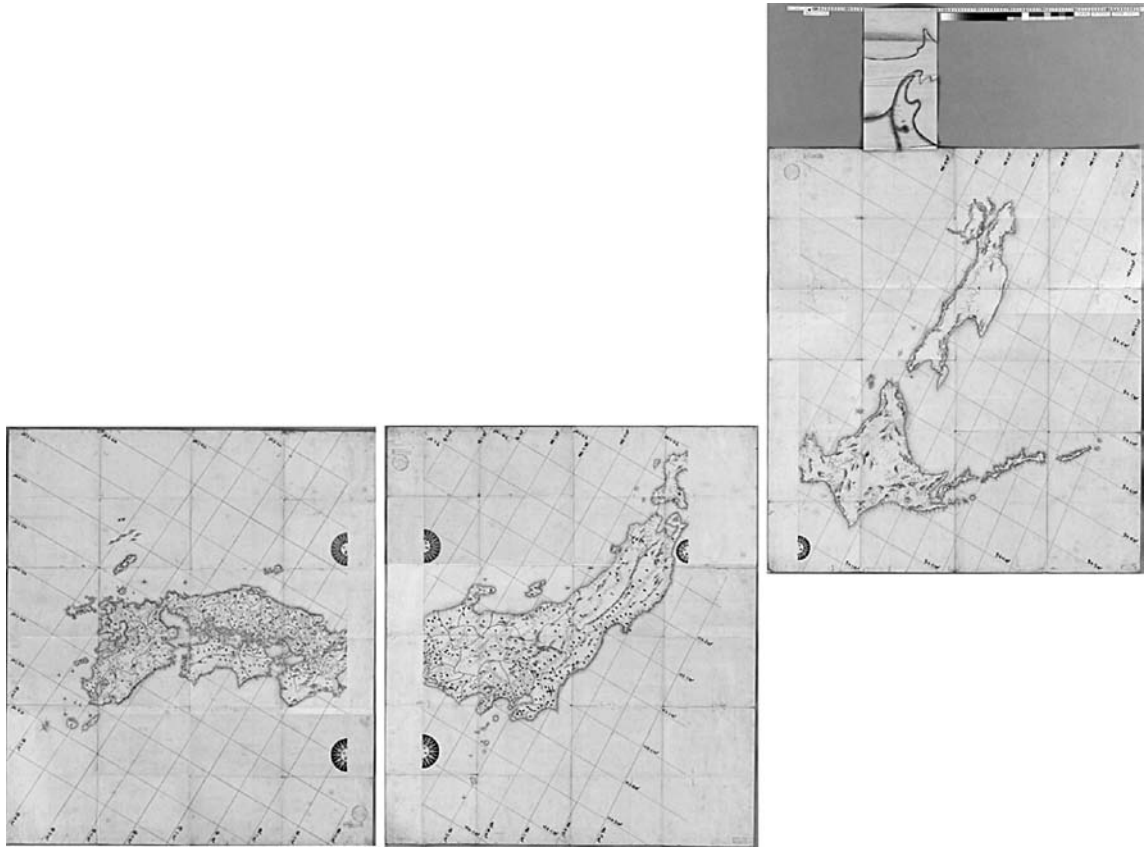


図1 カナ書き伊能特別小図（国立国会図書館蔵）

西日本：130cm×106cm

東日本：130cm×104cm

蝦夷地：131cm×105cm



図2 カナ書き伊能特別小図写 (ブランデンシュタイン=ツェッペリン家蔵)

上図：資料番号22 伊能特別小図写 (西日本)
66.2cm×87.8cm (付け足し部は除く)

左図：資料番号26 伊能特別小図写 (九州)
50.7cm×36.6cm

Report 2

The Siebold Incident and the Inō Map of Japan: From the perspective of Siebold-related map materials remaining in Europe

Hiro'o Aoyama
(National Museum of Japanese History)

■ 1828: The Siebold Incident

- Kageyasu Takahashi, the government Tenmongata, provided the map (i.e., Inō Map of Japan), a prohibited item, acquired by Siebold.
- The prohibited map was discovered among Siebold's belongings as he was preparing to return to Europe.
- Kageyasu Takahashi and other persons involved were punished by the government after a severe investigation.
- The map was confiscated by the government and Siebold was evicted from Japan.

■ What is the Inō Map of Japan provided by Takahashi to Siebold?

● Research conducted to date (Ryōkichi Ōtani, *Inō Tadataka*, 1917)

Conjectures based on limited materials (materials remaining in Japan and Siebold's writings and reference works)

Premise 1: Scale reduction (1° of latitude = approx. 12cm = 1:864,000 scale) ← Siebold's publication *Nippon*

Premise 2: 3 sections ← list of "items confiscated from Siebold by Nagasaki Omote Honda Sado-no-kami (i.e., Nagasaki Magistrate)"

Premise 3: Notations written in *kana*, easier for foreigners to understand

↓

The Inō Map of Japan acquired by Siebold = *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu* (Inō Special Small Map with *kana* notations) (National Diet Library collection)

(However, there had been a lack of evidence directly indicating acquisition of the map by Siebold)

● Present research (Hiro'o Aoyama, ed., *Map materials relating to Philipp Franz von Siebold in the Netherlands and Germany*, 2016)

Actual verification based on Siebold's own materials

← A copy of the *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu* was discovered in the archives of the Brandenstein-Zeppelin family (Hessen, Germany), Siebold's descendants.

Highlight 1: Coincidence in scale reduction (1° of latitude = approx. 12cm)

Highlight 2: Coincidence in coastline

Highlight 3: Coincidence in noted items and their location (e.g.: province borders, mountains, rivers, frames for *kuni* (province) and *gun* (country) names)

↓

Without a doubt, Siebold acquired and made a copy of the *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu*. The map that was confiscated by the government in the Siebold Incident is the *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu* currently in the collection of the National Diet Library.

■ Significance

Definite identification of the map that was at the center of the Siebold Incident (discovery of new materials relating to the Siebold Incident)

Actual verification based on direct materials that were in Siebold’s possession (discovery of the copy of the *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu*)

Actual verification of the fact that Siebold definitely acquired the *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu* (rejection of the theory of attempted personal delivery)

Actual verification over the period of a century (since Ryōkichi Ōtani, 1917)

Table 1 Inō Map of Japan and relevant map materials in the Brandenstein-Zeppelin collection

Item No.	Item name	Remarks	Vertical	Horizontal
22	Copy of <i>Inō Tokubetsu Shōzu</i> (western Japan)	Map name in Dutch language. Place names in alphabetic notation. Partially in red ink. Province borders, mountains (hachuring method) and rivers are noted. Korean Peninsula is expressed as mountainous terrain. Graticule lines are shown (1° of latitude = approx. 12.5 cm). Mesh (1.4 cm square) is inserted in western Kyushu. A portion of tracing paper (11.9 x 20.9) is appended. Copy of <i>Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu</i> (National Diet Library collection).	66.2	87.8
23	Copy of <i>Inō Tokubetsu Shōzu</i> (southern Kyūshū, western Shikoku)	Place names in <i>kana</i> and alphabetic notation. Partially in red ink. Province borders, mountains (expressed as mountainous terrain) and rivers are noted. Graticule lines are shown (1° of latitude = approx. 12.5 cm). Mesh (1.2 cm square) is inserted in western Kyūshū. Tracing paper is appended to the base paper (37.4 x 58.4). Copy of <i>Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu</i> (National Diet Library collection). Links to item number 24.	35.5	50.5
24	Copy of <i>Inō Tokubetsu Shōzu</i> (northern Kyūshū, San’in area, Tsushima)	Province borders and rivers are noted. The Korean Peninsula is expressed as mountainous terrain. Graticule lines (pencil markings, intersections in ink overwritten with “+” signs) (1° of latitude = approx. 12.5 cm). Azimuth line extends from Shimonoseki (pencil markings). Tracing paper is appended to the base paper (36.4 x 49.5). Copy of the <i>Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu</i> (National Diet Library collection). Links to item number 23.	35.7	49.3

Item No.	Item name	Remarks	Vertical	Horizontal
25	Copy of <i>Inō Tokubetsu Shōzu</i> (Western Japan) (reduction)	Province borders, mountains (hachuring method) and rivers are noted. Korean Peninsula is not shown. Mesh (1.2cm square, graticule lines). 2:1 reduction of item nos. 22, 23, 24 and 26.	34.2	31.6
26	Copy of <i>Inō Tokubetsu Shōzu</i> (Kyushu)	Place names noted in <i>kanji</i> and <i>kana</i> . Province names in rectangular frames (Hyūga, Ōsumi). Blank oval-shaped frames. Province borders, mountains (expressed as mountainous terrain) and rivers are noted. Graticule lines and “+” signs noted at intersections (1° of latitude = approx. 12.5 cm). Azimuth line from Cape Sata extending to Kuroshima, Iōjima, Takeshima, Kuchinoerabujima and Mageshima (pencil markings). Inclusion of mesh at the southern extremity of Satsuma Peninsula. Tracing paper is appended to the base paper (55.7 x 37.8). Copy of the Inō Special Small Map with <i>kana</i> notations (National Diet Library collection).	50.7	36.6

Excerpted from: Hiro'o Aoyama, ed., *Map materials relating to Philipp Franz von Siebold in the Netherlands and Germany*, 2016

Fig. 1 *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu* (Inō Special Small Map with *kana* notations) (National Diet Library collection)

Western Japan: 130 x 106 cm

Eastern Japan: 130 x 104 cm

Ezochi: 131 x 105 cm

Fig. 2 Copies of *Kana-gaki Inō Tokubetsu Shōzu* (Brandenstein-Zeppelin archives)

Above: Item no. 22, copy of *Inō Tokubetsu Shōzu* (Ino Special Small Map) (western Japan)

66.2 x 87.8 cm (excluding additionally appended portion)

Left: Item no. 26, copy of *Inō Tokubetsu Shōzu* (Kyushu)

50.7 x 36.6 cm

報告3

シーボルト・コレクションの彫刻

佐々木 守俊 (岡山大学)

コレクションの概要

ミュンヘン五大陸博物館には、シーボルトが日本で収集した70件あまりの仏像・神像などの彫刻作品が収蔵されている。小像が中心で、像高30センチを超えるものはまれである。尊種はさまざま、阿弥陀如来、観音菩薩（聖観音、十一面観音、准胝観音など）、地藏菩薩などポピュラーな像が中心だが、普賢延命菩薩や烏枢沙摩明王など、作例が比較的少ない像も含まれている。コレクションを通覧する限り、尊種にはばらつきがあり、シーボルトがある特定の尊種を意識的に収集したとは思えない。多様な尊種の存在は、収集当時の信仰の状況をそのまま反映しているものとみられよう。

ほとんどの像は制作事情や伝来が不明だが、阿弥陀如来坐像（S908）は台座底面の墨書から、安永5年（1776）に「予州宇和郡保内」、すなわち現在の愛媛県八幡浜市の行者が制作したと判明する。その他の像も、大部分は様式的に阿弥陀如来坐像とほぼ同時期、もしくはやや時代の下る、18～19世紀の像と判断されるが、阿弥陀三尊立像（S594、595_1、595_2）のうち阿弥陀如来像（図1）と観音菩薩像（図2）は16世紀にさかのぼる可能性をもつ。阿弥陀像と観音像はほんらい一具ではないとみられ、阿弥陀像の造形にやや形式化が見られるのに対し、観音像は身体や着衣の表現に柔軟さがあり、制作年代はより古いと思われる。

入手経路も不明だが、寺院の本尊級の像はほとんどなく、個人の念持仏だった小像がかなり含ま



図1 阿弥陀如来立像



図2 観音菩薩立像



図3 聖観音菩薩立像

れている可能性が考えられる。聖観音立像（S1699、図3）・十一面観音立像（S869）・文殊菩薩坐像（S858）・普賢菩薩坐像（S859）は、みな像高7～9センチ程度で、ヒノキと目される明るい褐色の針葉樹材を用い、素地仕上げで頭髮にあざやかな群青、着衣に金泥文様を施す。目が吊り上がり口を強く結んだ表情も酷似しており、同一工房で制作されたものとみられる。しかも、保存状態はきわめて良好で、寺院や家庭で長らく祀られたのではなく、制作されてまもない像をシーボルトが一括購入したとも想像される。このほか、商家で祀られていたとおぼしき恵比寿や大黒天などの福神像も収集されている。のちにふれる蛇身弁財天像も、同様に福神として個人宅で信仰されていたものとも考えられよう。

長崎で収集された可能性が高い像

伝来不明の像が多いなか、長崎で収集されたとみられる像が含まれることは、本コレクションの大きな特徴である。まず、天神坐像（S973、図4）の像底には「酒屋町」の墨書があり、長崎酒屋町で制作された可能性が考えられる。珍しいところでは、左手を額の前にかざして遠くを眺めるような鬼神の立像（S885、図5）がある。これは千里眼といい、長崎の黄檗宗寺院である興福寺や崇福寺などでは、航海神の媽祖の眷属として順風耳像とともに祀られる、長崎ならではの尊種である。本像は小像であることから、長崎に滞在する中国人の個人的な信仰対象



図4 天神坐像



図5 千里眼立像



図6 龍女立像

だった可能性が考えられる。様式的には江戸時代後期の作例と変わるところはなく、中国からの請来像ではなく、日本人仏師が中国人のために制作したものと推測される。両手で宝珠を捧げ持つ女性像（S886、図6）は、黄檗宗寺院の京都・萬福寺や長崎・聖福寺に見られる龍女像と考えられ、長崎で祀られていたものとみる余地がある。本像も日本での制作とみられるが、千里眼立像と同様、中国人の信仰を伝える遺品として注目される。

いっぽう、中国作とみられる像も存在する。観音菩薩坐像（S1945、図7）は人間臭い面貌、貫通せずに大きく舌状に垂れる耳朶、猫背ぎみの姿勢、ブロック状の体軀といった特徴を示す。こうした点は江戸時代の日本の作例とは異質で、中国からの請来像、またはその影響下に制作された像であることを思わせる。両脚部を含めた頭・体幹部を一材から彫出し、内刳りは施さない。硬質でずっしりした用材は日本の仏像ではあまり見かけないことから、中国作の可能性を考えたい。長崎の黄檗宗寺院には、作風の近い17世紀の中国作例が伝わっており、本像もまた長崎に伝来した可能性がじゅうぶんに考えられる。同様に、厨子入観音菩薩坐像（S928、図8）も、のっぺりとした顔立ち、角張ったあご、腹部にあらわした裙の上端を紐で結ぶ形状、抽象化された脚部の衣文線が明瞭な中国風を示す。はなやかな意匠の台座、光背も同様である。ただし、中国彫刻に特有のアクの強さがやや影をひそめている点から、日本での制作とみておきたい。いずれにしても黄檗宗関連の像であることはほぼ確実とみられ、長崎で収集された可能性が考えられる。

以上のように、シーボルト・コレクションには、長崎に伝来したとみるにふさわしい彫像が含まれている。これらの像は、あたりまえすぎる事実ではあるが、長崎がシーボルトの収集活動の拠点だったことをものがたる。同時に、海外に存在する黄檗様彫刻としての意義も大きく、さらなる研究の進展が望まれる。

シーボルトによる展示

1862年、シーボルトは2度目の来日での収集品による展覧会を、アムステルダム産業宮で開催した。この展覧会のようすを描いた図によれば、会場には高い壇が設けられ、仏像、屏風、仏具など



図7 観音菩薩坐像



図8 厨子入観音菩薩坐像

が並べられていた。壇の最上段には、さきのにのべた阿弥陀三尊立像に該当するとみられる像が安置されていた。その他、コレクション中の僧形坐像、蛇身弁財天像、仏教彫刻ではないが亀をかたどった筮筒（易占で使われる筮竹を入れる筒）の台（いずれも「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展に出陳）などに該当するとみられる展示品も確認される。絵画や工芸の作品とあわせ、まさにシーボルトの日本博物館をよみがえらせる実作品が、五大陸博物館にまとまって収蔵されていることの意義ははかりしれない。シーボルトが展覧会を構成するうえでいかなる選択をおこなったかを、私たちはこれらの作品を通じて実地に理解することができるのである。

（註）天神坐像の制作地、および千里眼立像の像名は、長崎純心大学講師の原田博二氏からご教示を賜った。

図1～図8はミュンヘン五大陸博物館所蔵。

Report 3

Sculpture Works in the Siebold Collection

Moritoshi Sasaki
(Okayama University)

Collection summary

The collection of the Museum Fünf Kontinente in Munich includes more than seventy Buddhist, Shinto and other sculpture works collected by Siebold in Japan. Centered in small pieces, there are few that exceed a height of 30cm. Though the subjects are varied, they consist mostly of *Amitabha Tathagata* (i.e., *Amida Nyorai*), Buddha of compassion (i.e., *Kannon Bosatsu*, *Shokannon*, *Juichimen Kannon*, *Juntei Kannon etc.*), *Jizo Bosatsu* and other popular Buddhist sculpture items while also including some relatively uncommon subjects such as *Fugen Enmei Bosatsu* and *Ususama Myoou*. An overview of the collection seems to indicate considerable variation in the subjects and it would be difficult to imagine that Siebold consciously sought to collect items of certain specific subjects. The diversity of subjects alone seems to reveal the state of religious beliefs at the time when they were collected.

While the circumstances surrounding the production or background of most of the figures remain unknown, it has become clear, based on an India ink inscription on the base of the seated statue of *Amida Nyorai* (S 908), that it is the work of a Buddhist ascetic in Yoshu, Uwa-gun, Honai, that is, the present-day Yawatahama City in Ehime Prefecture, dating from 1776. Most of the others, based on style, are judged to be from the 18th-19th centuries, about the same time period as the *Amida Nyorai* statue or perhaps somewhat later. It is possible that the *Amida Nyorai* (Fig. 1) and *Kannon Bosatsu* (Fig. 2) statues, two of the *Amida Sanzon* (triad) standing statues (S 594, 595_1, 595_2), may date from as early as the 16th century. It is thought that the *Amida Nyorai* and *Kannon Bosatsu* were not originally part of the group. While the *Amida statue* seems somewhat formalized in design, the body and robe of the *Kannon statue* appear to have a certain pliancy in expression and the date of production is thought to be earlier.

Though the route of acquisition is unknown, there are virtually none that would be considered the principal images of a temple and there are probably a large number of small images that were used in the personal worship activities of individuals. The standing statue of *Shokannon* (S 1699, Fig. 3), standing statue of *Juichimen Kannon* (S 869), seated statue of *Monju Bosatsu* (S 858) and seated statue of *Fugen Bosatsu* (S 859) are all in the range of 7-9cm in height, made of bright bronze-colored conifer wood, apparently *hinoki* (Japanese cypress) and, in the surface finish, the hair appears in a vivid ultramarine color and the robes have a gold-painted design. They also closely resemble one another in the facial expression with eyes slanting upward and lips strongly pursed, thus likely produced at the same workshop. Moreover, the state of preservation is also excellent and, rather than being enshrined for a

long time in a temple or at home, it is conjectured that Siebold purchased them as a group shortly after they were produced. In addition, Siebold also collected statues of *Ebisu*, *Daikokuten* and other so-called Gods of Good Fortune, perhaps previously enshrined in a merchant household. The *Jashin Benzaiten* statue, referred to later, is also thought to have been a subject of worship, enshrined in an individual home much like the Gods of Good Fortune.

Statues likely collected in Nagasaki

While there are many with an unknown past, a major characteristic of the collection is the inclusion of images thought to have been collected in Nagasaki. First of all, the base of the *Tenjin* seated statue (S 973, Fig. 4) bears the inscription “Sakaya-machi” in black India ink, raising the possibility that it was created in Sakaya-machi in Nagasaki. Among the unusual is the standing figure of a demon (*Kishin*, S 885, Fig. 5) with left hand raised to its forehead, appearing to be gazing off into the distance. It is known as *Senrigan*, a statue distinctively typical of Nagasaki, and would be enshrined, along with a statue of *Junpuji*, as attendants of the goddess *Maso*, at the Kofukuji Temple, Sofukuji Temple and other Obaku-sect temples in Nagasaki. Given the small size of the statue itself, it is thought to have possibly been the personal object of worship of a Chinese resident of Nagasaki. Stylistically, it does not differ in the least from similar examples dating from the late Edo Period and is presumed to have been produced for the Chinese resident by a Japanese sculptor of Buddhist images, rather than brought from China. The female statue (S 886, Fig. 6) holding a jewel in each raised palm is thought to be an image of the Dragon Princess as seen at the Manpukuji Temple in Kyoto, Shofukuji Temple in Nagasaki and other Obaku-sect temples and it is entirely possible that it was enshrined in Nagasaki. This statue also appears to have been produced in Japan and, like the *Senrigan* standing statue above, it has drawn attention as a relic that conveys the religious beliefs of Chinese residents.

Meanwhile, there are also sculptured works that appear to have been produced in China. The seated *Kannon Bosatsu* statue (S 1945, Fig. 7) indicates such characteristics as a human-like countenance, large, un-pierced, tongue-shaped dangling earlobes, posture with somewhat stooped shoulders and squareish physique. In this respect, it differs from similar examples in Japan dating from the Edo Period and was likely brought from China or perhaps produced locally under that influence. The head and trunk including the legs were carved from a single piece without any internal coring. Since the hard, sturdy wood material is not commonly seen in Buddhist statues in Japan, one tends to see the possibility of production in China. Since examples resembling this style from 17th-century China were conveyed to Obaku-sect Buddhist temples in Nagasaki, it is entirely possible that this image as well was brought to Nagasaki. Likewise, the *Kannon Bosatsu* seated image in a small shrine (*Zushiiri Kannon Bosatsu*, S 928, Fig. 8) also has a flat expressionless countenance, square chin, the shape of the upper edge of the hem appearing at the abdomen tied with a cord and the abstract pleats of the robe on the legs, which clearly indicate Chinese style. This also applies to the florid design of the base and *mandorla*. Due to the somewhat subdued effects of the distinctive eccentricity that characterizes Chinese sculpture, this should perhaps

be seen as an item produced in Japan. Regardless, it can be seen as an image that is definitely related to the Obaku-sect and it is quite possible that it was collected in Nagasaki.

As indicated above, the Siebold collection thus includes sculpture works that can be seen as having been brought to Nagasaki. Though quite natural, these images tell us that Nagasaki was the home base for Siebold's collecting activities. At the same time, their significance as sculptures in the Obaku style currently located overseas is also great and there is anticipation for further advances in research.

Exhibit by Siebold

Siebold held an exhibit at the Amsterdam Paleis voor volksvlijt (Palace of Industry) in 1862 featuring items that he had collected during his second sojourn in Japan. An illustration portraying a scene of the exhibit shows a platform that had been set up at the exhibit venue with rows of Buddhist images, screens, Buddhist implements and other items. The statues displayed on the upper level of the platform seem to correspond to the *Amida Sanzon* (triad) standing statues described above. In addition, the illustration also makes it possible to ascertain other items in the collection on display such as the seated figure of a Buddhist priest and the *Jashin Benzaiten* statue and, though not a Buddhist sculpture, the turtle-shaped base of a *Zeito* (tube of bamboo divining sticks used in divination) (all of which are displayed in the exhibit *Revisiting Siebold's Japan Museum*). The significance of the fact that the actual works, together with pictures and craftworks, that truly bring Siebold's Japan Museum back to life are all in the collection of the Museum Fünf Kontinente is unfathomable. Through these works, we are able to comprehend firsthand just how Siebold went about making selections as he set up his exhibit.

Note: Mr. Hiroji Harada, Lecturer, Nagasaki Junshin Catholic University, kindly provided the location of production of the *Tenjin* seated image and the name of the *Senrigan* standing image.

Captions:

Fig. 1: *Amida Nyorai* standing statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 2: *Kannon Bosatsu* standing statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 3: *Shokannon Bosatsu* standing statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 4: *Tenjin* seated statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 5: *Senrigan* standing statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 6: Dragon Princess standing statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 7: *Kannon Bosatsu* seated statue, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

Fig. 8: *Kannon Bosatsu* seated statue in a small shrine, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

報告 4

陶磁器から考えるミュンヘンのシーボルト・コレクション

櫻庭 美咲（国立歴史民俗博物館）

1. バイエルンのヴィッテルスバッハ家による日本磁器の収集

西洋では16世紀以降、異国の珍しい文物の収集が流行した。バイエルン王国を統治するヴィッテルスバッハ（Wittelsbach）家も、遅くとも16世紀以降より多種多様な異国の珍品を集め、優れたコレクションを形成した。そのなかには多くの日本の磁器や漆器がふくまれている。ミュンヘンにおけるヴィッテルスバッハ家の居城、レジデンツ宮殿には、2人のバイエルン選帝侯、マキシミリアン二世エマニュエル（1662～1726）とフェルディナンド・マリア（1636～1679）が集めた194点もの極めて上質な日本磁器（17～18世紀、有田製）が所蔵される。これらの日本磁器はレジデンツ宮殿内の豪華な陳列室に飾られ、王家が所有する当時有数の西洋宮廷の美術として位置づけられ高く評価されてきた。

ミュンヘンのシーボルト・コレクションは、1874年にバイエルン国によって購入されたが、その王ルートヴィッヒ二世（在位1864～1886）は熱烈な美術の愛好者であった。自らの居城に陳列されていた多数の磁器が日本産であることを全く知らなかったとは想像しがたい。先述のように、コレクションの所有者となったバイエルン王家ヴィッテルスバッハ家は、祖先が収集した古い日本の磁器の所有を通じて17世紀末より日本と関わってきた歴史を持つ。ただし、18世紀までに王家が収集した日本磁器はもっぱら西洋向けの輸出品として生産された有田焼のみであり、シーボルトが収集した陶磁器とは全く性質が異なる。シーボルトが集めた陶磁器の大半は、日本の富裕層のための暮らしの道具であった。

2. シーボルト・コレクションの陶磁器の概要

シーボルト・コレクションの所蔵目録（長男アレクサンダー作成）によれば、これらの陶磁器は、おもに第3室にある第2・第6・第7・第8・第9の5つの展示ケース内におおまかに用途別に分類されていた。陶磁器の展示配列は、産地ではなく主として用途に基づいている。

これら各展示ケース内に納められた陶磁器のタイプは以下の通りである。

- ① 第2ケース：食器と酒器
- ② 第6ケース：大型の皿、鉢など
- ③ 第7ケース：花器、煎茶道具と酒器
- ④ 第8ケース：置物、香炉、手焙り、灯籠などの調度品
- ⑤ 第9ケース：喫茶や懐石料理のための食器

陶磁は約270点あり、その産地は肥前や瀬戸、美濃、三田、京都、備前、江戸から中国にまで及ぶ。これらの陶磁器は、性格の違いにより次の4グループに分類することができる。

- ① 日本国内で用いられた生活の道具としての日本陶磁

- ② 外国人向けの日本陶磁（土産物および貿易品のタイプ）
- ③ 日本の大名や公家の使用のために作られた日本陶磁（御庭焼）
- ④ 中国陶磁

3. 陶磁器はどこで収集されたのか？ — 日本陶磁の流通と唐物（中国）趣味から考える

シーボルトがバイエルン国王ルートヴィッヒ二世に宛てた1864年11月の書簡によれば、このコレクションは「1859年から1862年に日本で収集され、大部分は江戸で入手したもの」とされるが、陶磁器に限って言えば、当時の江戸における陶磁器の流通状況を鑑みればそれは可能であったと思われる。例えば有田焼は、シーボルトが長崎滞在中に収集した可能性も考えられるが、江戸の瀬戸物屋でも売られていた。

瀬戸や美濃、京都、三田などの産地の陶磁についても、産地より江戸へ供給され、江戸市場で流通していた。多岐にわたる陶磁器の収集内容は、全国の武士が一堂に会し多様な産地の物資が集められる首都江戸の土地柄を反映したものといえよう。江戸における陶磁の流通状況は、シーボルトが集めた兵庫県産の珉平焼みんぺいの小皿（図1）の類品が、汐留遺跡の龍野藩脇坂家屋敷たつのはん（図2）や駒込うなぎなわて おさきてぐみやしき 鰻縄手御先手組屋敷といった江戸の武家屋敷跡地の発掘調査で発見されたことから裏づけられる。ところがこのように多様な産地を取り揃えながらも、シーボルトは産地分類にはほとんど関心を払っていない。シーボルトがアムステルダムで催した展示（1863の）目録における陶磁器に関する個別資料記述の大部分は、「陶器」、「磁器」、「古い」、「新しい」、「貫入が入っている」といった物質の性質に基づく分類や、「砂糖菓子用の皿」や「重箱」、「鯛形の深皿」といった用途と形状にもとづく器種名称に終始している。

一方このコレクションに、明・清時代の中国陶磁が少なからず含まれる点については、「日本展示」という趣旨からやや逸れるようだ。アムステルダムの展示目録や父の目録に基づき長男アレクサンダーが作成したとされるコレクション目録のいずれにも、中国の産地名は一切記されていない。シーボルトはその産地を認識していなかったのかもしれない。しかし周知のとおり、唐物（中国）趣味による中国陶磁愛好はすでに江戸時代の富裕層の間では浸透していた。この事は、江戸の武家屋敷跡地の発掘調査において、江戸時代の地層から数多くの中国陶磁が発見されたことから



図1 緑釉龍文浮彫小皿 珉平焼 五大陸博物館蔵
シーボルト・コレクション



図2 緑釉龍文浮彫小皿 珉平焼 汐留遺跡脇坂家
屋敷跡出土 東京都教育委員会蔵



図3 青花八仙祝寿梅花文鉢 景德鎮窯 五大陸博物館蔵シーボルト・コレクション



図4 青花八仙祝寿梅花文鉢 景德鎮窯 汐留遺跡保科家屋敷跡出土 東京都教育委員会蔵

明らかである。たとえば、本展示中の青花八仙祝寿梅花文鉢（図3）は東京都汐留遺跡の会津藩保科家屋敷（図4）や駒込鰻縄手御先手組屋敷跡地において、白磁貼花竜虎鶴鹿文犀角杯形杯は江戸の長崎奉行与力同心屋敷跡地（渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡）の発掘調査において、その類品の陶片が発見されている。つまり、中国陶磁も江戸で入手できる状況だったのである。

4. 記録からわかる贈り物

次にその収集経緯が、記録から特定できる例を挙げる。はじめに瑠璃釉鶴文大植木鉢（図5）に注目したい。本植木鉢は1861年11月9日、神田の種痘所にいたシーボルトの弟子の蘭方医たちから贈られたことが鉢に添えられた目録からわかる。弟子たちは、植物好きのシーボルトのために大変大きな珍しい植木鉢を贈り、師への感謝を表し別れを惜しんだ。

精緻な赤絵により鳳凰を描いた赤絵牡丹鳳凰文栓付德利（図6）と横浜道の風景を表した金地藍彩日本名所図盃（図7）は、シーボルトが作成した目録の記載から江戸の外国奉行からの贈答品であることが分かる例である。これらは、シーボルトが幕府から解雇され江戸を去るにあたり、そ



図5 瑠璃釉鶴文大植木鉢 瀬戸焼 五大陸博物館蔵シーボルト・コレクション



図6 赤絵牡丹鳳凰文栓付德利 九谷系 五大陸博物館蔵シーボルト・コレクション



図7 金地藍彩日本名所図盃 美濃焼（江戸絵付）五大陸博物館蔵シーボルト・コレクション



図8 染付光格天皇菊紋蘭文皿・碗 有田焼 五大陸博物館蔵シーボルト・コレクション

の立派な功績をたたえるために贈られた。とりわけ盃は珍しく、開港間もない横浜港（1859年7月開港）周辺の景色が描かれている。その贈答時期（1861年11～12月）から、開港直後の横浜の建造物を知る手掛かりとしても注目される。

さらに、光格天皇（在位1780～1817）の菊の御文を描いた碗と皿（図8）、杵築藩が梅干壺として使用した壺に豪華な蒔絵を施した漆塗染付雄鶏竹雲鶴蛸唐草文蓋付壺（図9）や、紀伊新宮藩の御庭焼である三楽園焼の紫釉象形双耳鳳凰雲牡丹文壺のように、公家や武家に関わる一般には流通しない特殊な品も散見される。これらについては、残念ながら贈答の記録をたどることができないが、公家や武家とも親交をもつシーボルトの行動範囲を勘案すれば贈答品であった可能性が高いと言えるだろう。



図9 漆塗染付雄鶏竹雲鶴蛸唐草文蓋付壺 有田焼 五大陸博物館蔵シーボルト・コレクション

5. おわりに

このように、陶磁の収集内容は、シーボルトの広い人脈を印象づけるものであった。また、中国文化を内包する幕末期の有産階級による道具（陶磁）の所有状況を投影する「時代の鏡」としての性格は、本コレクションの優れた特質といえよう。1874年にバイエルン国によって買い上げられたシーボルト・コレクションは、多種多様な生活文化の品々を幅広く取りそろえた総合的な性格によって、王家に古くから伝わる日本磁器コレクションからだけでは知りえなかった、より実像に近い日本のイメージをバイエルン王国にもたらすものとなったにちがいない。

Report 4

Siebold Collection in Munich as observed through ceramics

Miki Sakuraba

(National Museum of Japanese History)

1. Former owner of the Siebold Collection: Collection of Japanese porcelains by Haus Wittelsbach

Starting in the 16th century, collecting rare items of foreign countries became popular in the West. Haus Wittelsbach, monarch of the Kingdom of Bavaria at the time, also engaged in acquiring a wide variety of rare items from other countries from the 16th century onwards, which formed into a valuable collection. Quite a number of Japanese porcelains and lacquer wares are included in the collection. Münchner Residenz, the castle where the Wittelsbach family resided, houses as many as 194 items of extremely fine Japanese porcelains (produced in Arita during the 17-18th centuries) acquired by the two electors (Kurfürst), Maximilian II Emanuel (1662~1726) and Ferdinand Maria (1636~1679). These Japanese porcelains were displayed in gorgeous showrooms and highly acclaimed as artifacts of the prestigious western court owned by a royal family.

The Siebold Collection in Munich was purchased in 1874 by the reigning King of Bavaria Ludwig II (reign 1864~1886), who was a great art lover himself. It is hard to believe that he was totally ignorant of the fact that the multitude of ceramics displayed in his own residence palace was from Japan. Haus Wittelsbach, the royal family of Bavaria who became the owner of the collection, came into contact with Japan from the end of the 17th century through ownership of old Japanese porcelains acquired by their ancestors. However, Japanese ceramics collected by the royal family until the 18th century were mostly Arita products specially manufactured for export to the West, and are totally different in nature from the ceramics acquired by Siebold. The majority of ceramics that Siebold brought back were items for the wealthy Japanese people to be used in their daily life.

2. Overview of the ceramics of the Siebold Collection

According to the Siebold Collection Catalogue (prepared by his eldest son Alexander), these ceramics were displayed in loosely organized categories in five cases, Cases 2, 6, 7, 8 and 9 in Gallery 3 with a main focus on how they were used rather than where they were produced.

The ceramics displayed in each of the following cases are listed below.

- (1) Case 2: Dishware and sake utensils
- (2) Case 6: Large dishes and bowls
- (3) Case 7: Flower vases, sencha equipment and sake utensils
- (4) Case 8: Furnishings such as decorative objects, incense burners, hand warmers and lanterns

(5) Case 9: Dishware for use at kaiseki formal banquets or for drinking tea

Origins of the ceramics are wide-ranging from Hizen, Seto, Mino, Sanda, Kyoto, Bizen, Edo to China. These ceramics may be divided into the following four groups by difference in nature:

- (1) Japanese ceramics used in Japan as utensils in everyday life
- (2) Japanese ceramics for foreign visitors (souvenirs and trade goods)
- (3) Japanese ceramics made for use by Japanese daimyō (clan lords) and aristocrats (*Oniwa-yaki*)
- (4) Chinese ceramics

3. Where were the ceramics acquired? --- Observing from the distribution system of the Japanese ceramics and Chinese taste (*karamono-shumi*)

According to what Siebold wrote in his letter to the Bavarian King Ludwig II dated November 1864, the collection was gathered in Japan during 1859 and 1862, mainly in Edo. As far as ceramics were concerned, Large part of them must have been available in the city of Edo under the distribution system in those days. For instance, pieces of Arita ware could be obtained during Siebold's sojourn in Nagasaki, but they were also available at china shops in Edo.

Ceramics produced in Seto, Mino, Kyoto and Sanda were supplied directly from the local to be distributed in the market of Edo. Looking at how the collection is composed of ceramics from varied origins, it is safe to say that they were acquired in the Capital of Edo, a unique city where samurai from all parts of Japan gathered and commodities from different regions were available. That ceramics were easily obtainable in Edo is also proven by the fact that broken pieces similar to the small dish of Minpei ware produced in Hyōgo from Siebold's collection (Fig. 1) were found during excavation and research of samurai residence sites, such as the Wakisaka Family of *Tatsuno han* (domain) in Shiodome Ruins (Fig. 2) and Komagome *Unaginawate Osakitegumi-yashiki*. In spite of Siebold having collected ceramics produced in multiple places, he showed little interest in categorizing the production areas. The Siebold's exhibition catalog of Amsterdam in 1863 contains individual explanations of ceramic items focused mainly on properties such as earthenware, porcelain, old/new and with crazing, or on the usage and forms such as a bowl for sugar confectionery, a set of stacked boxes and a sea bream-shaped dish.

On the other hand, a number of ceramic items from the Ming and Qing dynasties are also found in this collection, which seems slightly out of place from the *Japan Exhibition*. The regions in China where the ceramics were produced are neither included in the catalog for the exhibition in Amsterdam nor in the collection catalog produced by Alexander based on his father's catalog. Siebold may have been unaware that they were produced in China in the first place. As is well-known, Chinese taste (called *Karamono-shumi*) for appreciating Chinese ceramics was already widely popular among the bourgeois during the Edo period. This is obvious from the fact that excavations conducted in samurai residence sites of Edo unearthed many pieces of Chinese ceramics from the stratum of Edo era. For instance, broken ceramic

pieces, similar to” *Bowl decorated with Eight Immortals and plum flowers in underglaze blue*” (Fig. 3) displayed in this exhibition, were excavated from the residence sites of daimyō Hoshina Family of the *Aizu han* in the Shiodome Ruins (Fig. 4) and Komagome *Unaginawate Osakitegumi-yashiki* in Tokyo. Those resembling “*White porcelain rhino-horn shaped cup with appliqué design of dragon, tiger and deer*” were found in Nagasaki *Bugyō Yoriki Dōshin* residence site of Edo (named “the Ruin of 5 Chome, Sendagaya, Shibuya-ku”). In other words, Chinese ceramics were also available in Edo.

4. Items identified as gifts from the record

To name some of the items that can be traced from the records how they came into the hands of Siebold, the first would be “*Blue glazed Large Flower Pot with relief of Crane*” (Fig. 5). The attached list explains that the pot was a gift presented to Siebold on November 9, 1861 from doctors of western medicine who studied under Siebold at the Medical Institute for Smallpox in Kanda. In appreciation of his medical guidance, his followers must have chosen the very large precious flower pot as a farewell gift for Siebold who loved plants.

Other examples are porcelain delicately decorated with a phoenix in red called “*Sake-Bottle with stopper decorated with peony and phoenix in overglaze enamels*” (Fig. 6) and sake cups painted with landscapes of Yokohamado called “*Sake Cups decorated with Japanese Sights in overglaze blue on golden backgeow*” (Fig. 7). Both of them were recorded by Siebold as gifts from foreign magistrates. The artifacts were presented to Siebold to commend his great achievements at the time when he was dismissed from the government and had to leave Edo. The sake cups are considered particularly rare because they showcase the landscapes of the vicinity of Yokohama Port (opened in July 1859.) Gifted sometime between November and December of 1861, these sake cups are also important as they offer information about the buildings in Yokohama soon after the opening of the port.

Furthermore, some of the artifacts are special items that were distributed only among court nobles and the samurai class. They are “*Bowl and Dish with the Imperial chrysanthemum emblem of Kōkaku-Tennō (reign 1780-1817) in underglaze blue*” (Fig. 8), “*Covered pot lacquer-painted with a cock, bamboo and cranes on octopus arabesque in underglaze blue*” (Fig. 9), which is a gorgeous gold-lacquered pot to preserve pickled plums used in the *Kitsuki han* and “*Purple-glazed binaural pot with phoenix, clouds and peony*” of Sanrakuen ceramics produced in a kiln located in the residential compound (*oniwa-yaki*) of the *Shingū han* in the Kii Region. Regrettably, we cannot find any record of these rare items as to whether they were given to Siebold as gifts. Yet, considering the wide network of people Siebold enjoyed including court nobles and samurai, they were most probably given to him as gifts.

5. Conclusion

Siebold’s collection of ceramics strongly projects how broad his range of personal relationships was. One of the striking characteristics of this collection is that it serves as “a mirror of the time” projecting the

ownership of (ceramic) items by the bourgeois class who also embraced Chinese culture in the late Edo Period. The Siebold Collection, a comprehensive collection with a rich variety of items representing Japanese lifestyles at the time, was purchased by the Kingdom of Bavaria in 1874. The collection undoubtedly introduced to the people of Bavaria a more realistic image of Japan than that offered by the collection of Japanese Export porcelain passed down for generations within the royal family since the 17th century.

Captions

1. *Small dish with a dragon-design relief in green glaze*, Minpei-yaki (Awaji), Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente
2. *Small dish with a dragon-design relief in green glaze*, Minpei-yaki, excavated from the Wakisaka Family residence site of Shiodome Ruins, Tokyo Metropolitan Board of Education
3. *Bowl decorated with Eight Immortals and plum flowers in underglaze blue*, Jingdezhen, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente
4. *Bowl decorated with Eight Immortals and plum flowers in underglaze blue*, Jingdezhen, excavated from the Hoshina Family residence site of shiodome Ruins, Tokyo Metropolitan Board of Education
5. *Blue glazed Large Flower Pot with relief of Crane*, Seto, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente
6. *Sake-Bottle with stopper decorated with peony and phoenix in overglaze enamels*, Kutani type, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente
7. *Sake Cups painted with Japanese Sights in overglaze blue on golden background*, Mino, decorated in Edo, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente
8. *Bowl and Dish with the Imperial chrysanthemum emblem of Kōkaku-Tennō in underglaze blue*, Arita, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente
9. *Covered pot lacquer-painted with a cock, bamboo and cranes on octopus arabesque in underglaze blue*, Arita, Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente

五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクション関連年表

西暦	和暦	シーボルト・コレクション関係	日本、オランダ、ミュンヘン、東西貿易関係
1787	天明7		松平定信が老中となる（寛政の改革）
1789	寛政元		フランス革命
1790	寛政2		貿易半減令、江戸参府4年に1回となる
1795	寛政7		フランス革命軍がオランダを占領
1796	寛政8	2月17日、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト、ドイツのヴェルツブルクで誕生	
1799	寛政11		オランダ東インド会社解散 米船フランクリン号が長崎に寄港
1804	享和4 文化元		レザノフが長崎に来航 ナポレオン皇帝即位
1808	文化5		間宮林蔵が「間宮の瀬戸」（間宮海峡）を確認
1811	文化8		オランダがフランスに併合され出島孤立
1814	文化11		オランダ王国が独立を回復。ウィーン会議
1815	文化12	ヴェルツブルク大学に入学。医学を専攻。自然科学・地理学・民族学、また探検に関心を抱く	
1817	文化14		ヤン・コック・プロムホフが日本商館長に着任（～1823）
1820	文政3	ヴェルツブルク大学を卒業。医院を開業	
1821	文政4		伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」が完成
1822	文政5	オランダへ行き、東インド陸軍付軍医としてバタヴィア（現ジャカルタ）へ向かう	
1823	文政6	バタヴィアへ到着、父の親友であったファン・デル・カベレン総督により、日本商館の医官に任命される。8月11日に長崎に到着。川原慶賀に植物画などを描かせる	ヨハン・ウィレム・ド・ステュルレルが商館長に（～1826）
1824	文政7	鳴滝に診療と学術研究のための塾を開設。蘭学者に最新の西洋医学を教授	
1825	文政8		異国船打ち払い令
1826	文政9	2月、商館長ステュルレルに従い、ハインリッヒ・ビュルガーとともに江戸参府。川原慶賀も同行。将軍家斉に謁見。最上徳内、高橋景保らと交流。7月、出島に帰着	ヘルマン・フェリックス・メイランが商館長に着任（～1830）。マラッカ、シンガポールなどイギリス領に
1827	文政10	妻其扇（楠本たき）との間に娘イネが生まれる	
1828	文政11	帰国船が台風で座礁、禁制品の不法入手が発覚（シーボルト事件）	
1829	文政12	シーボルト事件で土生玄碩ら連座。高橋景保は獄死、国外追放の処分を受ける。12月30日長崎を離れる	
1830	文政13 天保元	1月3日に離日、同28日にバタヴィア着。7月、バタヴィア経由でオランダ帰着	
1831	天保2	植民省日本問題担当顧問に就任	
1832	天保3	ライデン・ラーベンプルフの自宅に収集した日本コレクションを展示・公開 『日本』（Nippon）第一分冊を出版	
1833	天保4	『日本動物誌』（Fauna Japonica）第一分冊を出版	
1834	天保5	ヨーロッパ各地で『日本』の販売、研究資金援助を要請（サンクト・ペテルブルク、モスクワ、ベルリン、ドレスデン、プラハ、ウィーン、ミュンヘン、ワイマール、ライプツィヒ）	
1835	天保6	『日本植物誌』（Flora Japonica）第一分冊を出版 バイエルン王国ルートヴィッヒ I 世に民族学博物館設立計画書を提出	
1837	天保8	オランダ国王ウィレム I 世に民族学博物館設立計画書を提出。1837・1838年、オランダ政府がコレクションを購入	米船モリソン号事件
1838	天保9	オランダ政府がコレクションを買い上げラーベンプルフの自宅で展示を続ける	
1839	天保10	コペンハーゲン国立博物館館長トムセンがヨーロッパ以外の諸民族の博物館設立についてシーボルトに指導を求める	蛮社の獄
1840	天保11		和蘭風説書で阿片戦争の情報が入る

西暦	和暦	シーボルト・コレクション関係	日本、オランダ、ミュンヘン、東西貿易関係
1843	天保14	パリ王立図書館部長ジョマールに民族学博物館設立を勧める	
1844	天保15 弘化元		オランダ国王ウィレムⅡ世が将軍家慶に日本開国勧告の親書を送る
1845	弘化2	オランダ国王ウィレムⅡ世の命によりライデンの自宅にて貧民救済のための日本展覧会を開催。その目録も出版 ヘレナ・ガーゲルンと結婚	
1846	弘化3	長男アレクサンダーが生まれる	
1847	弘化4	ライン河畔ポッパルトに転居。プロイセン国籍を取得	
1852	嘉永5	次男ハインリッヒが生まれる	
1853	嘉永6	ボンに転居	ペリーが浦賀、ブチャーチンが長崎に来航
1854	嘉永7 安政元	三男マキシミアンが生まれる	日米和親条約の締結
1856	安政3		日蘭和親条約の締結
1857	安政4	1829年の処分が解除	
1859	安政6	4月、長男アレクサンダーとマルセイユを出航。8月、和蘭商事会社顧問として長崎に入港	
1861	万延2 文久元	4月、長崎を立ち横浜到着 6月、幕府の招聘で江戸赤羽の接遇所に到着。幕府顧問として外交の助言と学術教授を行うかたわら資料を収集 10月、顧問を解任される、11月、江戸退去の申し渡しを受け、横浜に退く 12月、アレクサンダーは英国公使館通訳に就任	
1862	文久2	1月、横浜を離れ長崎へ 5月、長崎を出港し、離日 8月、シーボルトの収集品がアムステルダムへ送り出される 11月、シーボルトがオランダ帰着	ミュンヘンでは、バイエルン国王マキシミアン・ヨーゼフⅡ世に任命されたモーリッツ・ワーグナーがホフガルテン(王宮庭園)・ギャラリー棟において民族誌学的コレクションを展示・管理する学芸員として雇用される(～1868)
1863	文久3	5月、日本コレクションをアムステルダムの産業振興協会で展示。その観覧手引を出版	薩英戦争
1864	文久4 元治元	ヴェルツブルクに転居。ヴェルツブルクの王立マックスシューレ大講堂で「日本博物館」を開設。一般公開 11月、シーボルトはコレクションの購入を請願する書簡をバイエルン王ルートヴィヒⅡ世に提出	3月、マキシミアン・ヨーゼフⅡ世急逝。ルートヴィヒⅡ世がバイエルン国王に即位(～1886)
1866	慶応2	3月、日本コレクションをヴェルツブルクからミュンヘンに移転 5月、ホフガルテン北側のギャラリー棟にて展示。ワーグナーはホフガルテンギャラリー棟にほかの民族誌コレクションの一部を移し、日本コレクションと統合 10月18日、風邪をこじらせ敗血症の併発により死去(享年70歳)	
1867	慶応3	「民族誌博物館シーボルトによる日本コレクションの目録」がアレクサンダーにより作成される	幕府、薩摩藩、佐賀藩がパリ万国博覧会に初参加
1868	慶応4 明治元	1月、ワーグナーはアルゲマイネ・ツァイトゥング新聞にシーボルトの日本コレクションを「ミュンヘンの新しい民族誌博物館」として紹介し、熱心にコレクションの購入を訴えた 9月、日本コレクションを中心とするギャラリー棟の展示は「王立民族誌コレクション」として開館	戊辰戦争(～1869)。江戸開城
1874	明治7	バイエルン政府が日本コレクションを買上げ	
1912	大正元	「王立民族誌コレクション」は「王立民族誌博物館」に改称	
1917	大正6	「王立民族誌博物館」は「民族学博物館」に改称	
1925	大正14	「民族学博物館」は博物館の現在の所在地(マキシミアン通り)に移転される(1954年「国立民族学博物館」への改称を経て、2014年より現名称五大陸博物館)	

質問用紙

- ・ご質問のある講演者の氏名をご記入ください。

- ・質問内容

